冷たい風に晒される屋上で目にしたのは、一足の長靴と、鞄の上に置かれていた数枚の原稿用紙だった。

雪の積もった休日の校舎に、生徒たちの姿はない。おそらく彼女は、空からやってくる雪だけに看取られたのだろう。靴の置かれたすぐ傍のフェンスに指をかける。けれど、眼下の光景は見なかった。ぐちゃぐちゃになった彼女の身体なんて、見たくはなかった。

かじかむ指で、彼は徐に携帯電話を取り出した。１１０番と１１９番のどちらを先にコールするべきか逡巡し、すぐにどちらでもいいという結論に至った。

フェンスにかけた指から、力が抜け落ちていく。指から腕に、そして全身がつられるようにして崩れ落ちる。コンクリートの上に座り込んだ彼は、重石となっていた長靴をどけて、原稿用紙を手に取った。

彼女が最期に残した手紙、あるいは物語だろうか。その物語を読むことは、ここに呼ばれた自分の義務だと思ったからだ。

原稿用紙を見てすぐに、彼は愕然とした。目を皿にして、手許の用紙を何度も見返した。その度に、驚愕は絶望へと変わり、やがて諦念へと朽ちていく。

身体を支えていた仮初の氷柱が、音を立ててひび割れていく。

きっとこの気持ちを理解できる人などいない。たったこれだけの原稿用紙を見て、彼と同じように打ちひしがれる人はいないだろう。この感情は、彼と彼女の関係を正しく理解できる人にしか伝わらない。そんな歪な人間は、もうこの世にはいない彼女だけだ。いや、彼女にすら、伝わっていなかっただろう。

ゆっくりと舞い落ちる雪が、生気を失った手に降り積もる。地面に倒れる彼女にも、この雪が死に化粧を施してくれているだろう。

突如として、彼は焦燥に駆られた。ただ一人この場に駆けつけた自分が何かしなくていいのか。けれど今になってできることなど見当もつかなかった。

投げやりに視線を落とし、さっきまで読んでいた原稿用紙を睨み付ける。そしてまた、焦った。仄暗い感情がどっと押し寄せてくる。

雪のように冷たい感情だけが、身体を突き動かした。

程なくして、彼女の遺体は病院に搬送された。現場には彼女の靴と、何も書かれていない白紙の原稿用紙が数枚だけ置かれていた。

1

神木総一がいつも通り商品の陳列をしていると、すでに私服に着替えている社員の川上に肩を叩かれた。
「もう上がるから、あとはお願い」
「お疲れ様です」
「六時には他のアルバイトも来るから、あとは神木君のやりやすい方法で指示しておいて」
お疲れと言って川上はそそくさと帰宅した。総一は時計を確認して、まだ六時までには時間があると確認してから商品整理に戻る。
しばらくして、六時丁度にやって来た小山に仕事の指示を出す。気怠げな返答が戻ってくるだけであろうと総一が予想していると、やはり彼はあくび混じりに了解と言って、のそのそと仕事に取りかかった。
十時まで十分前の閉店間際。もつれ込んだ翌日の準備は通常時間内に終わりそうにない。残っている社員の草野は時間を気にする余裕も、ましてアルバイトに指示を出す余裕もなく懸命に、それでいて緩慢に手を動かしている。
頼んでいた仕事を終えた小山と、総一と同じ時間に出勤していた谷岡が、手持ちぶさたに店内を見渡しているのが目に入る。
「二人とも手空いてる？」
「空いてるけど」二人揃って少し顔をしかめ、目を見合わせてから返答する。
「悪いけど、向こうに置く看板と商品を倉庫から持ってきて欲しいんだ」
看板を置く位置を指差して説明する。
「看板って何だっけ」
「先月も使ったやつ。前に片付けてもらった場所にあるから」
二人は一層表情を険しくし、首を傾げる。総一は店内の時計を見て、溜め息を吐く。
「やっぱり、裏のゴミを片付けておいてくれるかな」
定刻より十五分過ぎた時間に仕事を終えた。話しながら歩いている小山と谷岡を置いて、総一は先に更衣室へ戻って制服を着替える。
更衣室のすぐ隣にあるトイレに行ってから帰途に就こうとすると、灯りの点いた部屋から声が漏れ聞こえた。
「いっつも最後にゴミの処理させるなよ。先にやっとけばいいだろうに」
「神木だってサボってる訳じゃないんだし、それぐらいは我慢してやろうぜ」
小山と谷岡の声だった。総一は一度足を止めたが、声をかけずに立ち去った。

エアコンの効いていた店内を出ると、夏の粘っこい夜気が否応なく絡みつく。

駐輪場で自転車のキーを回してから、総一は携帯を取り出し、連絡用のアプリから部活の後輩の名前を探す。『次号のシフトの作成はまだ時間がかかりそうですか。そろそろ一次締切なので、できれば早めにお願いします』

シフトというのは、どの部員が誰の作品を校正するか割り振ったものだ。昨日に送ったそのメッセージには、いまだ既読の印がついていない。

総一の所属する大学の文芸部は、部員がとりわけ少ない訳ではない。しかし部を取り仕切るはずの三年生の代は極端に少なかった。所属こそしているが部活動に参加していない者が数名いるだけ。元々は真面目な部員もいたが、留学や兼部している部活の兼ね合いで二年生の時に退部してしまった。

そのために、三年生で唯一よく部に顔を出す総一が、自動的に部長を務めることになった。他の副部長や会計といった役職は、今の二年生が担っている。その件について役職持ちの彼らは、異議を申し立てることこそしなかった。だが丁度先程、小山らが浮かべたのと同じ困惑の表情を、総一に対して浮かべていた。

手に持った携帯が振動する。

『すいませ～ん。今週中には作っておきます』

簡単なメッセージと意味のよくわからない顔文字を見下ろし、『わかりました』と返信を打つ。携帯をしまうと、途端に逆流してきた胃液に口の中が苦くなる。

不快感を押し殺して自転車のスタンドを上げる。だが店を出てすぐの交差点で、ペダルを踏む足を地面に下ろした。信号が赤だからという理由だけでなく、見知った顔があったからだ。

「あ、神木先輩。偶然ですね」

まったく偶然を装っていない口調で、七瀬葉月（ななせはづき）に声をかけられた。栗色のショートヘアーを揺らして愛想良く微笑（ほほえ）む後輩は、何を考えているのか予測しにくい。

「いつもこんな時間に買い物なんて、精が出るね」

「一時間ぐらい前までは大学の図書館に籠（こも）っていたので。それにこの時間なら先輩とも会えるだろうと思って」

照れるでも面白がるでもなく、淡白な声色だった。彼女の言葉は、どこか相手をからかっているような気配を感じさせる。

総一が隣に並ぶと、彼女は食材の詰まったレジ袋を、無言で自転車のかごに載せた。歳が一つ下の後輩は、総一よりもずっと強（したた）かに見えた。

「神木先輩は今日も一人ですね」

「いつも一人みたいに言わないで欲しいな」

「でも今日は一人ですよね。たまには同僚の人と食事に行ったりしてもおかしくないでしょうに」
「どこも仕事終わりに一杯なんて人間関係だとは限らないよ」
「でも、大学でも一人でしたよね。食堂で寂しくカレー食べてませんでした？」
記憶を巡らすが、総一が食堂で七瀬を見た記憶はない。どこで見ていたのか。
「今日は講義を取っている知り合いが居なかったから。昨日は一緒だったよ」
肩をすくめて見せると、七瀬は興味をなくしたように前を向く。信号が変わると、彼女は総一の一歩前に出る。
「七瀬さんはもう部室に来ないの？」
はぁと疲れたような息を吐いた後、七瀬は総一の方に振り返って後ろ向きに歩く。
「合わないんです、空気に。みんな雑談しに来てるだけって感じで、創作のことなんて頭の隅にあるかもわからない。そんなところに無理していく必要もないかな、という訳です」
総一が意外だと思っていると、それが顔に表れていたらしい。彼女は不服そうに目を眇めた。
「君がそんなに熱心だとは意外だったよ」
「全然熱心じゃないですよ。だって熱心にならなくても面白い話ぐらい書けますから」
謙遜とは間違えようのない、切れ味の良い否定。そしてすぐに、冗談です、と言って微笑む。
「あまり冗談ばかり言っていると、面白いものは書けても、面白い人間関係は築けないと思うよ」
「なんですかそれ、上手いこと言ったつもりですか？」
くだらない洒落を、彼女はせせら笑う。
「でも小説か人間関係かと言われれば、私だって人間関係の方に関心持ちますよ、普通に。小説は書くのも読むのも好きだけど、興味がなくても生きていけますから。でも人には関心を持たないと、いつの間にか都会の砂漠で一人置き去りですよ。ねえ先輩」
「どうして僕に同意を求めるのかな」
「さあ、どうしてでしょう」
人を食ったもの言いが、これ以上の追及は無駄だと語っていた。
「でもそれなら周りと話を合わせた方が、角が立たなくて合理的じゃないかな」
「いくら合理的でも、人がドッグフードを食べるのは、やっぱり嫌じゃないですか？」
冗談です、とは言わなかった。不思議と彼女の口調からは蔑みの色を感じさせない。現に、蔑んではいないのかもしれない。ただ、区別しているだけ。そんな小学生がいじめの言い

訳にでも使うような言葉が連想された。
「退部についてはなし崩しにお願いします。入部した目的も、一応はもう果たしましたから」
「……」
横目で覗き見る七瀬の視線に気付かないふりをして、総一は自転車を引いた。住宅街に入るにつれ、明滅する光の群れが届かない暗闇に潜っていく。頼りない電灯と微かな月明かりだけが、総一の足元を照らした。
「私からすれば、神木先輩がいまだに部に残り続けていることの方が、よっぽど不思議ですけどね」
「そんな風に見えたかな」
「ええ。部室ではそれはもう、微妙な表情をしてますよ」
「仲の良かった先輩も以前より来なくなっているし、後輩にもそれなりに気を遣うからね」
「けど残っているのは、絢辻先輩への未練、ですか？」
総一は足を止めた。頭上の電灯が、暗闇の中で彼の姿を浮き彫りにする。
「確かに、未練はあると思うよ。あの人の作品は勿論、普段の言葉遣いやその感性、不意に見せる笑顔ですら、常人のそれとは異なる趣を感じさせた。そんな彼女に追いつくことが、僕の唯一の目標、みたいなものだから」
七瀬は珍しく押し黙った。他人からすれば、彼の言葉は妄言にも等しく聞こえたことだろう。
「相変わらず入れ込んでますね。おまけに少女趣味なことで」
冷静で、それでいて呆れた口調で言う。
「そうだね。それに今でも僕はあの人みたいな作品が書きたいと思っているし、もっと言えばその人みたいになりたかった」
「だからって部活に入っている必要はないんじゃないですか。彼女が今もいるなら、ともかく」
総一の口元が緩む。核心を突かれた時にできるのは、焦って否定するか、逃げるように笑うことぐらいだった。
「ただの自己満足なんだろうね」
ふーん、と感情を掴みかねる反応を一つ。
「あんまり他の女にうつつを抜かしていると、鈴ちゃんに愛想つかされますよ」
「……知っていたのか」
「先輩たちの母校周辺のことはいろいろ調べてますから、自然に察しがつきますよ」
七瀬はそれ以上の追及はせず、その瞳を妖しく細めるだけだった。
「それで何かわかりましたか？　絢辻先輩の、自殺の理由」
七瀬の声色から、冗談めかすような軽薄さが消えた。上目遣いに覗き見てくる彼女を、総一はじっと見下ろした。

「前にも言っただろ。彼女から聞けることは聞いたが、特筆すべき情報はなかった。それに今は、探りを入れるために彼女と付き合っている訳じゃない」
彼女は一言、そうですか、と冗談半分に聞き流すだけだった。丁字路に突き当たると、七瀬は自転車のかごに放り込んだ袋を手に取った。
「それでも、何かわかったことがあれば教えてくださいね」
「ああ。僕だって今のままでいいなんて思ってない」
「ならよかった」
買い物袋を提げた彼女が総一の家と反対方向に歩き出すと、何かを思い出したように振り返った。
「そういえば先輩は、わかりましたか？」
「わかったって、何を？」
「絢辻先輩の自殺現場に残されていた、白紙の原稿用紙の意味」
二人の間にできた数メートルの空間を、風が吹き抜ける。夏とは思えないほどに涼しげなその風に呼応するように、どこからか黒猫の鳴き声が聞こえて来た。
「さあ。僕じゃあの女性の考えていることなんて、わからないよ」
灯りを点けると、空っぽな部屋が照らし出される。部屋の大部分を占拠する机と本棚以外は、ちゃぶ台と広げたままになっている布団ぐらいしか目につかない。誰かが代わりに住み始めても、この部屋は何の問題もなく機能し始めるのだろう。
総一以外に誰もいない空間は、静寂そのものだった。テレビや音楽機器の一つもない空間からは、生気というものを感じられない。
バイト先のスーパーで買った特売品をレンジに放り込み、温めたそれらをちゃぶ台に広げる。唐揚げ弁当に焼きそばという、彩りに欠けた食事を淡々と済ませた。容器をごみ箱に放り込み、早々に机の前に座る。
引き出しの鍵を開けて、書きかけの原稿用紙とプロットを書いたノートを取り出す。加えて鞄の中から、いつも持ち歩いている真っ新な原稿用紙を取り出して、いつもの空間を作り出す。小説を書く以外には何もできない、総一にとって自分を追い込むだけの空間を。
ノートに書いた内容を確認し、総一は頭の中で書くべきことを整理する。しばし考えてからペンを手に取り、脳内に生まれた言葉を書きこむ。
思いついた言葉を書き殴り、三十分ほど経ってからそこに書かれた言葉を見返した。
燃料が注入されていた頭の中が、急速に冷えていくのを感

じた。

胸の内がむかむかした。それをかき消すように、総一は原稿用紙に書いた文字を片っ端から消した。

総一の目の前には、再び白紙の原稿。こんな作業を何十回、何百回とやって産み出されたものが、誰の感興をそそる訳でもない。結局、四年も前から何を書けばいいのかなんてわかっていない。ただそれでも、最後になるかもしれないこの物語だけは、書き留めておく必要があると信じていた。

身体から力が抜けて、総一は床に倒れ伏す。目を閉じてもすぐに眠ることができないから、また余計なことを考える。

今日のアルバイトはどうだった？　欺(あざむ)こうとする気もない奴らの尻拭いだ。大学はどうだった？　講義なんて自分は本当に出ていたのか？　そう言いたくなるぐらい校内での時間が希薄だ。気苦労の特売所みたいな部活にいつまで残るんだか。

そうだ、と総一は思った。そんなものに構っているから疲れたんだ。そうやって時間が過ぎていくのを待つ、堕落した日々。逆境も気概も目標も、何もない。

そのまま眠ることもできず、起き上がって本棚に手をかける。

総一は机の引き出しから、一冊のコピー本を取り出す。背表紙やページのそこかしこがボロボロになっている。なにせ総一はその作品を何度も読み返しているし、一緒に掲載されていたはずの他の作品は彼自身の手で切り離されている。

自分で製本し直したその冊子を開き、眠るまで彼女の作品を読み続けた。

×　×　×

彼女の作品に魅入られるのに、時間は必要なかった。その作品は入学して間もなく、高校の文芸部で配布していた小説だった。周囲からの何気ない称賛で物語を書き始めた自分とは、文字の羅列に込められた密度が違った。

総一のたった十五年の人生は、その瞬間に嘲笑(あざわら)われた。

もしかしたら、それほど巧(うま)い訳ではなかったのかもしれない。筋書き自体はそれほど突飛なものではない。独特な世界の描写も、狂気すら漂わせる感情表現も、理解されないだけかもしれない。そう思いながらも、彼はその作品を忘れることができなかった。

けれど何度読み返しても、彼は彼女の紡ぐ言葉を自分の言葉で変換することができなかった。どうすればその感性に追いつけるかわからなかった。それでも彼は、どうにかその物語を自分の言葉にしようと、また何度も穴が開くほど読み返した。

舞台となるのはごく普通の日本。主人公の青年は過去に臨死体験をした時から、予知夢のようなものを見ることができるようになった。最初は曖昧でどこか現実離れした景色を見るだけだったが、その景色は日を増すごとに現実のそれとなり、これから自分の周囲にふりかかることを知らせているのだとわかった。

彼はその力を、善行のために使った。身の周りの人間を助けるためにその力を使い、実際にその力で何人もの人々の危機を回避した。

けれどある殺人事件の被害者を助けたことで、代わりに幼馴染の同級生が殺された。ここからこの作品の空気が豹変した。復讐を決心しそれをすぐに成し遂げた主人公は、後悔に圧し潰されると同時に、自分の持った力の恐ろしさとその可能性を理解した。そして彼はその力を使って、自分と自分に関わる者だけのユートピアを作り始めた。

ここから彼の心理描写は常軌を逸し始めた。一人の安全を確保するために、何人もの赤の他人を犠牲にした。彼は常に自分のできる最善の行動を選んだつもりだった。けれど結果は最善となってくれなかった。友人を助けるためにしたことが、その友人の足を奪った。危険な仕事に就こうとする恋人の死を防ぐためにしたことが、彼女から仕事も財産も全て奪った。

彼の中で次第に動機と目的が倒錯するようになり、彼は少しずつ壊れ始めた。彼が予知した未来を変えることに呼応するかのように、世界では一つまた一つと異様な事態が起こり始めた。気象の異常変動や動植物の異常繁殖は、世界の〝普通の景色〟というものを変えた。

そんな事態に目もくれず、彼は自分の理想の環境を作ろうと専心した。そして彼は、望まない過程を受け入れることで、望んだ結果を手に入れた。恋人も親友も誰一人危険に晒されることのない理想の環境を作り出した。衣食住に困ることもない。人の悪意や自然災害に晒されることもない。先行きの見えない将来に日々悩まされることもない。そんな環境を周囲の人々は喜んで受け入れた。彼らにはそこしかなかったから。けれどその果てに彼に残ったのは、ただの虚無感だった。

自分が意のままに作り出した関係に、かつてのような人の営みを感じることはなかった。他者のことを、決められた台詞を喋る人形のようにしか思えなかった。

そして彼は今まで守ってきた人々を、自分の手で一人一人殺した。両親も親友も恋人も、誰もいなくなった後で外の世界を見渡した彼は、ようやく気付いた。自分が見覚えのない壊れた世界にいることを。

その世界の光景は、脳に腫瘍を残すように総一の記憶に焼き付いていた。

セピア色の景色はおよそ現実離れした色を彷彿(ほうふつ)とさせた。
空であるはずの場所にあるのは、急激な発展の後に漂う停滞感を醸し出した街。街並みがそのままひっくり返って、今にも落ちんばかりの状態で上空を占有している。
地面であるはずの場所にあるのは、時間の流れを忘れたように静止した空。そんな異常な世界にあっても、雲はあくびをしているように悠然と地面に寝そべる。雲間から覗(のぞ)ける蒼は、そこが地面であるにも関わらず、際限なくその色が続いていると思わせられた。
辺りに人はいなかった。空であるはずの地面に生える巨大な樹木は、それぞれの枝が何重にもうねって伸びているにもかかわらず、それが奇妙な統一性を持っていた。その周囲を這う虫のようにうねった黒い何かは、やがて空から降る塵(ちり)の雨となってこちらに落ちてきた。
常識もこれまでの価値観も何もかも否定されたその景色は、主人公が最初に見た夢の光景だった。その時彼は、未来を変えたつもりになっていた自分が、妄想を肥大化させた道化だったのか、それとも本当に未来を変えて来たのかわからなくなった。
彼はただ一人で虚しく笑い、物語は終わった。
その作品は文芸部が、部活紹介のブースに展示していた作品の一つだった。絢辻沙耶(あやつじさや)という名前の部員が書いた作品。他の作品は記憶に残っていない。
高校に入学した総一は、人生で初めて自分の意思で部活を決めた。もっとも、それは超常的な天災に襲われたようなもので、その決断を自分の意思だと言ってしまっていいのかはわからない。

「逆上がりってできる？」
手のかじかむような寒さが本格的に押し寄せて来た冬の折、下校途中に偶然会った沙耶は唐突にそんなことを聞いた。
「昔はできましたよ。でも、今はどうだか」
「私も、小学生の時は難なくできていたけど、この前試してみたら思いの外上手くいかなかった」
総一の場合はできるようになるまで一月以上かかったが、そんなことを敢えて口にする必要はないだろう。
「なんでまた逆上がりなんて？」
沙耶は総一の質問には答えず、ふらっと通りがかった公園に入っていった。彼もそれについていく。
夕暮れ時の公園に遊んでいる子供はいない。もう帰った後なのだろう。
他の遊具やベンチには目もくれず、彼女は高さの異なる鉄棒が並ぶ場所へ向かった。自分の身長に頭一つ足した高さの鉄棒の前に立つ。この公園では一番高いものだ。

「勉強とかしなくていいんですか。来年のこの時期にはもう受験でしょ」
「神木までやめてよ。そんなこと言ってくるのは親だけで十分」
沙耶は鉄棒を両手で握り、十分に助走をつけて身体を持ち上げるまでの動きをシミュレーションする。
「スカートのままやって大丈夫なんですか」
「下に体操着を履いてるし、周りには神木しかいないから問題ないよ」
「そういうこと言うと、勘違いされますよ」
「勘違いする相手には言わない。でも神木は、私にそういうことを期待していないでしょう」
「どうでしょうね」
シミュレーションを終えて、沙耶はもう一度助走をつけ直し、そのまま勢いよく踏み出す。ふわりと浮き上がった身体は、そのまま鉄棒を絡めとるように回転し、一瞬だけ身体が反転する。
「うん。今日はちゃんとできた」
「前にもやっていたんですか」
「うん。だけど今日は会心のできだ」
沙耶は満足気に微笑む。普段大人びた空気をまとう彼女が、こんな風に子供じみた笑顔を作るのは珍しい。

「日常に些細(ささい)な変化が起きただけで、目の前がまったく違った景色に見えることってない？」
総一がした質問に答えようとしているのだと気付くのに時間がかかり、彼は問いに返答できなかった。
「私にはよくある。近頃は特に。寝過ごして一つ後の駅に降りると、異国に放り出されてしまったんじゃないか。陽の昇っていない深夜に目が覚めると、昼間の自分とはまったく違う誰かが自分の中に入り込んでいるんじゃないか。そう感じて、震える」
「なんですかその恐怖体験」
「恐怖じゃないかな。でも途端に心細くなる。他人と共有していると思っていたものは、私一人だけが見ていた世界なのかもしれない。私が見ていたと思っていたものは、実は私じゃない誰かが見ていたものかもしれないって」
沙耶の言葉は理解したつもりでいられるが、理解できなかった。けれど理解されないことそのものが、この女性(ひと)が心細いと口にする原因なのだと言うことはおぼろげに伝わった。
「先輩も、心細いと感じることとかあるんですね」
「そんなのいつもだよ。神木は私をどんな人間だと思っていたの」
「自由人とか……もし神様がいるなら、こういういい加減な性格なんだろうっていう印象ですね」

「私のようなか弱くて何もできない女子を捕まえて、まったく酷いなぁ」
彼女は皮肉交じりにこちらを睨んで、すぐにまた涼しげな表情に戻る。
「一人で見ていてもつまらないから、他人にも私の見える景色を見て欲しい。けど突然そんな世界がやって来ても上手く思い出せなくなるから、自分から見に行って焼き付けようと思った。それが質問の答えかな」
「それで、逆上がりですか？」正直よくわからなかった。
「そう、逆上がり。一瞬だけど、自分の身体が逆さまになった時に見えるの。まったく違う世界が。神木がべた褒めしてくれた作品なんて、逆向きに見えた景色をそのまま書いただけだしね」
「そのままって、どういう目をしてるんですか」
入学して間もなく受け取った部誌のことを思い出す。思い出すと言っても、忘れたことなんて一度もない。
とりわけ小説を読むことが好きだった訳でもない総一は、あの小説を書いた沙耶に憧れて部活へ入った。想像に違わず、彼女は部内でも一目置かれていた。それは単に、変わり種の人種であったから上手く距離を詰められる人間がいなかっただけなのかもしれない。そんな中でも彼女は部をそつなくまとめ、その一方で何と言うこともなく周囲を驚かせる作品を書き上げてきた。そんな彼女の存在に、総一はただただ惹かれた。
帰り道に会えば、一緒に話す程度には親しい関係だった。自分の他にそんな友達を見たこともない。けれど彼女が総一に本心を晒したことは、ほとんどなかった。
それでも総一は、彼女のいなくなった部活で上手でも下手でもない小説を書き続けた。彼女と言葉を交わし、時には一緒に帰ることもある。けれどそんな関係に、あの作品を読んだ時ほどの価値を見出すことはない。
何にも囚われない彼女の在り方に憧れた。どうあっても自分が変わることのできない姿に羨望を抱いた。彼女の見ている世界を自分も見てみたいと思った。価値観という概念それ自体を変容させてしまうようなあの世界を、描くことができればと切望した。
「じゃあ僕も逆上がりすれば、先輩が書くような作品が書けますか？」
「無理かな」
即答された。
「だって私が見てる景色を神木が書ける訳ないじゃん」
「それじゃあ他人に同じ景色を見てもらうなんて、不可能じゃないですか」
「うん。だから、わかってもらおうと足掻(あが)くんじゃない」

夕明かりに照らされた沙耶の笑みは、この世界のものとは思えないほど儚く見えた。
「わかってもらいたいなら、プロとか目指さないんですか。そうすれば、より大勢の人にも読んでもらえる」
「そうだね……神木は、私に作家になって欲しい？」
「なって欲しいなんて言い方は変ですけど、挑戦すればいいのにとは思いますよ。先輩にはそれぐらいの能力があると思いますから」
沙耶は目を瞬いて総一のことをじっと見た。疑問符を浮かべる総一を見ると、彼女はどこか寂しそうに目を細めた。
「そんなに器用じゃないよ、私は」
彼女は口を尖らせて、総一の額を軽く小突いた。
「人に期待するより、自分で頑張りなよ。まあ前みたいに美味しくない話を書いてるようなら、作家なんて夢物語だけど」
沙耶は時折、事の良し悪しを味や匂いで表現する。それも一貫性はなく、本人が思いつくまま気紛れに言葉にしているだけのようだった。
「やっぱり面白くなかったですか、あれ」
「全然。自分の真似事みたいなことされてもね。前に読ませてもらったやつだって、匂いは良かったんだから」
呆れるように首を振った。価値基準はよくわからなかったが、どうやら味は及第点を貰えなかったらしい。
「でも、前みたいに書いてれば、そのうち見えると思うよ。神木は私と似ているから」
「取って付けた様に慰められても嬉しくないですよ」
「まあ気にするなって。そのうち何か見えてくるさ」
沙耶は鉄棒の支柱に寄り掛かり、視線を虚空に向けた。一人で佇む彼女の輪郭が、酷くおぼろげで、不確かに見えた。不思議がる総一に対して、彼女が繕うように見せた表情は、気味の悪いほど優しいものだった。
総一が疲れたように息を吐くと、彼女はそれを見て悪戯っぽい笑みを見せる。総一は彼女の顔から目を逸らし、深々と溜め息を吐いた。
彼女は一人虚空を見つめて目を細くした。その表情は、彼の理解が届かない、孤独な笑みだった。

翌日、総一は一人でもう一度公園にやって来た。昨日沙耶が逆上がりをしたのと同じ鉄棒で、彼も逆上がりをしようと試みた。そして失敗した。助走の時点で足を滑らせてしまい、身体は少しだけ宙を浮いて鉄棒に届く前に地面に落ちた。何度か試みたが上手くいかない。小学生の頃は簡単にできたはずなのに、なぜかその日はできなかった。遅くまで遊んでいた小学生が、不甲斐ない高校生の姿を見て大笑いしていた。
翌週から学校では試験週間に入った。書きかけの小説の執

筆を進めながら勉強をしていると、時間は瞬く間に過ぎた。それ以降、逆上がりの練習をする気力は起きず、あの時の会話だけを記憶に残して練習をすることはなくなった。

三年生に進級してすぐに、彼女は部を辞めた。本人は受験もあるからとこぼしていたが、彼女の成績が学年でも最上位であることは部員の誰もが知っていた。彼女にしては適当な言い訳に、皆から引き留められるだろうと総一は思っていた。けれど彼女はそんな隙すら与えなかった。第一、彼女を止められるほど近しい友人を、総一は知らなかった。

そして絢辻沙耶はいなくなった。三年生の冬、雪の降る校舎の屋上から飛び降りた。頭が真っ白になっていた彼に対して警察はいろいろなことを聞いてきた。警察だけでなく、クラスや部活の人間からも話を聞かれた。彼女の友達だったという女の子が彼の許にやって来て、熱心に話を聞いてきたこともあった。けれど何を聞かれたのかも、相手の顔も思い出せない。覚えている余裕すらなかった。

彼女が死んでから四年が経った今も、彼の前には白紙の原稿用紙がある。言葉を尽くしても、どんな物語を紡いでも、納得できたことは一度もない。

あの時逆上がりができていれば、同じ景色が見えていればあるいは、総一は目の前の、白紙の原稿用紙に、ふさわしい言葉を綴ることができただのだろうか。

それから彼は、日常のあらゆる景色を俯瞰した。地下鉄の喧噪を、行き交う生徒たちの姿を、通りがかった公園の光景を。沙耶の言うような景色を見ることはなかった。

2

グラスの中の氷が、小気味良い音を立ててコーヒーの中を転がる。グラスを差し出すと、絢辻鈴はほっと息を吐いてペンを置く。

「受験勉強お疲れ様」

「ありがとうございます」

肩に流れる黒髪を揺らして、僅かに頭を下げる。

律儀に裾を正してからいただきますと言って、袖の先から伸びるか細い指でしっかりとグラスを手に取る。定価数百円の紙パックに入っていたコーヒーを、彼女は大事そうに少しずつ飲んだ。

窓から射し込む陽射しが、ちゃぶ台の上に広がったノートや参考書を照らす。部屋の中は猛暑なんていざ知らず、備え付けの冷房が発する冷たい風に満ちている。

「今日はだいぶ進んだし、あとは忘れないうちに復習を心掛けておけば大丈夫だと思う」

「はい。今日もありがとうございました」

ほっと息を吐いて気が抜けたのか、鈴は正座から足を崩す。椅子と机があるのだからそちらで勉強すればいいのに、彼女はわざわざ床の上でちゃぶ台を使って勉強している。曰く、人に教えてもらう時は対面にいてもらった方が良いからだという。そういうものかもしれないと総一も一応は納得したが、これだけは彼女が譲らなかったのだから頷くしかなかった。

「もうすぐだったよね。美術館に出品する絵の締切」

鈴は照れくさそうに頷く。白くて細い指が、手に持ったグラスをぐっと握りしめる。

「去年はいろいろ上手くいかなくて、納得のいく絵が出せなかったので。でも総一さんは、そんな私に諦めるな、後悔しない道を選んだ方がいいと言ってくれました。だから私も逃げずにいられました……今年こそはちゃんとやり遂げたいんです」

三年生ならすでに引退している時期だということは、同じ高校のOBである総一も知っていた。それでも彼女は自主的に部活に残り、絵を描き続けていた。

「お義父さんの方は大丈夫？　沙耶先輩からも教育熱心な人だって聞いてたけど」

「私は沙耶さんみたいに優秀ではないので、隠れて絵を描いていることがばれたら怒られるかもしれません」

気まずさを押し殺そうと懸命に笑みを繕うが、無理をしていることは明らかだった。

「でも大丈夫ですよ。勉強だって総一さんに見てもらって順調ですから。それに私みたいな普通の娘でも、沙耶さんみたいなすごい人ぐらい期待してもらえるなんて、むしろ光栄なぐらいです」

拳を作って背伸びするような仕草を見せる鈴に対して、総一はただ頷いた。内心で苦虫を噛み潰しながら、その意気だと励ました。

「そういえば、進路はこのまま国立の大学でいいの？」

「はい。私は今のところ明確な目標もないので、できるだけ上の大学に行ければそれでいいかと思ってます」

「そっか。少し遠いけど、絵が好きで続けて来たなら美大や芸大って選択肢もあると思ったけど。鈴ちゃんの絵は素人の僕が見ても、展示されている絵とそれほど遜色ないように見えたけど」

「そんなとんでもないです！」

手と首を一緒に横に振って否定した。

「まあ僕には詳しいことはわからないけど、やっぱり難しいもの？」

彼女はそれから少し考えて、いえ、と笑みを湛えて返事した。

「それに私なんかじゃ、まだまだ実力不足だと思います」

照れくさそうに視線を逸らした鈴は、何かを思い出したように通学鞄に手を入れる。
「お借りしていた部誌、長いこと借りていてすいません」
表紙のよれた部誌を丁寧に両手で差し出す。五年前に、総一が高校の入学式でもらった文芸部の部誌だ。とは言っても、鈴に貸していた部誌は総一が入部してから別にもらった同じ号のものだった。
「それは構わないけど、またどうして昔の部誌なんか？　前にも読んだことはあったよね」
「少し必要だったので……それに私も沙耶さんの書く世界は好きですから」
鈴と知り合ってすぐの頃に、総一は同じ部誌を貸したことがあった。彼女と話し、付き合うようになったきっかけも、総一の先輩であり彼女の義姉である絢辻沙耶だったからだ。
「でもこの部誌なら沙耶先輩も持っていただろうし、家に残ってないのかな」
「私が母と絢辻の家に越してきた時に、部屋を空けるために遺品も整理し直したそうなので。沙耶さんの小説もたぶんその時に」
普通は一人娘の遺品をそう簡単に処分するだろうか。総一は言葉には出さなかったが眉間にしわを寄せた。
「ということは、沙耶先輩の自殺の手掛かりになるようなものが残っている可能性も……」
「お役に立てずにすいません」
鈴が俯くと、室内に居心地の悪い沈黙が満ちる。冷房の音だけが騒々しい音を鳴らしていた。
「遺品のことを聞いた時、お義父さんは何か言ってなかった」
「いいえ。そんなこと気にする暇があるなら勉強しろって。逆に怒られちゃいました」
悪戯を咎められた子供のように無邪気に笑って見せた。
「右腕、どうかしたの？」
「えっ」
驚いた鈴は、制服の袖の上を右腕でさすっていた。無意識の行動だったのだろう。
鈴が抵抗するのも構わず、総一は強引に袖をまくった。目立った傷こそなかったが、打撲で腫れた痕のようなものが残っていた。すでに治りかけているのか、虫に刺されたと言われても納得のできる程度のものだ。
「これ……」
「確かに口論になった時についた跡ですけど、私にも非があったんです。沙耶さんのことしつこく聞いたりして、お義父さんを逆撫でするようなことを」
沙耶のことを聞き出そうとして口論になった。それはつまり、鈴の怪我の原因が総一にあるということだ。

「ごめん。本当にごめん」
鈴の手を握って、総一は酷く弱々しい声で謝った。
「そんな！　気にしないでください。怪我のことはお義父さんも慌てて手当してくれましたし。それに私が望んでやったことですから」
それでも総一は、重ねて何度も謝罪の言葉を口にした。その間ずっと手を握っていたことに気付き、ようやくその手をほどいた。気まずさを紛らわせるためか、鈴は急に参考書を片付けたり、まったく関係のない話題を持ち出したりした。
「そういえば、総一さんは今どんな小説を書いているんですか？」
「僕の書く話なんか、沙耶先輩に比べたら全然面白くないよ。五年経った今でも、その差は埋まりそうにない」
「私は総一さんからお話を聞いたり、小説を読んだりしただけですけど、すごい人だったんですね。私みたいな凡人とは別世界の人みたい」
「別世界の住人か……」
机の上にグラスを置いた総一は、机の引き出しを一瞥する。鍵のかかった引き出しの中に眠る途中書きの原稿と沙耶の小説を比べて、思わず笑いがこぼれた。自分の書く筋書きは、三文芝居の様なものでしかないと自嘲せずにはいられなかった。
「でも私は、総一さんの小説も面白いと思います。主人公が地道に努力していく姿とか、沙耶さんの小説よりも親近感が湧きますし、それに、えっと……」
指を折って懸命に褒めるところを探していく。これ以上気を遣わせているのが見ていられなくて、総一も別の話題を探した。
「僕の話はいいから、鈴ちゃんの絵の話でもしよう。そういえば今どんな絵を描いてるのか、聞いたことがなかったから」
絵の話題を振ると、鈴は口籠ってしまった。総一が以前に同じ話題を持ち出した時は、嬉々として自分の絵のことを語っていた。それだけに、総一は何か間違えたのかと内心でやきもきした。
「えっと、来月には部の絵が美術館に飾られると思うので、それまでは秘密ということで」
何かを隠しているようではあるが、先程までのように気まずさを押し隠している様子はなかった。
「じゃあ今度デートも兼ねて一緒に見に行こう」
鈴の表情が固まった。
「え、デート、ですか？」
「付き合っていると言っても、勉強や沙耶先輩のことを聞いてばかりだから。たまには息抜きもしよう」
そう言うと、硬直していた鈴の表情が次第に綻び始める。

総一は間違った言葉を口にしていなかったと、安心してほっと息を吐いた。
そして胸中で何度も、間違ってはいないと、自分に言い聞かせた。

3

午後の講義の後、総一は文芸部の部室を訪れた。活動日ではなかったが、部室には十人あまりの部員がすでにいた。彼らはミーティング用に並べられた長机の奥にある、絨毯を広げたスペースで麻雀や談笑に耽っていた。ほとんどは部室にも慣れた二年生たちだ。総一の姿を認めると、部員たちは目視や快活な挨拶を交えて一礼した。そしてすぐに、机上に広げた麻雀卓や各々の会話に戻っていく。
総一は部員の荷物置きとなっているロッカーから、書きかけの原稿用紙を取り出す。いつもは忘れることなどないが、部室に置いている講義のレジュメに紛れ込んでしまっていた。
用事はたったそれだけだった。ついでに話の続きを書こうかとも思っていたが、今の部室では捗りそうもない。
文芸部では年に四回、季刊誌となる部誌を発行することになっている。そこに掲載する作品の締切が、あと二週間に迫っていた。と言っても総一が部誌に掲載する用の作品は、過去に書き上げたものがすでにあった。総一が今書いているのは、それとはまったく別の作品だった。
総一は歓談する後輩たちの姿をちらりと見る。締切に焦る様子や活動の話をする部員はいなかった。無論、部誌を発行する度に部員全員が作品を掲載する訳ではない。毎号全員の作品を載せていてはページ数も膨大になるし、そうでなくても、やはり三ヶ月に一作品をコンスタントに書き上げるのは難しい。まして総一も、いつも活動の話ばかりをしていろなどと思ってはいない。
けれど彼の脳裏では、いつか七瀬が放った言葉が反芻していた。
部室を後にしようと原稿用紙を整理していたところで、誰かが扉を開く。一年生の加藤だった。総一を見ると、ひょいと頭を下げる。加藤が入って来たところを見た他の後輩たちの反応は薄かった。
「どうかした？」
「あの、ちょっと相談があって。今書いている作品のことなんですけど、煮詰まっていて……」
加藤は新入生だが、最初の号から作品を掲載しようと、やる気があった。けれど彼は週に一回のミーティングを含めて、あまり部室には来ない。
「これでも一応部長なんだ。話ぐらい聞くよ」

長机に座り、加藤の話を聞く。普段は口数が少なくあまりコミュニケーションが巧くない彼だが、自分の作品のことになると饒舌に語った。総一はその言葉の一つ一つをわかりやすく噛み砕いて返しているだけだったが、それでも彼のわだかまりを解くのには役に立ったらしい。

「神木先輩、今週の土日とか暇ですか？」

話の途中に、後ろで話をしていた女子部員が声をかけてくる。

「みんなでカラオケにでも行こうって話してたんですけど、たまには先輩も行きましょうよ」

その言葉に乗じて、周りにいた部員も声を上げる。狭い部屋で何人も大きな声を上げれば、室内は忽ち騒がしくなる。

視線を感じた。総一にというよりは、総一が今いる周辺全体へ向けられた、嫌悪の視線。

「有難いけど、今週は原稿や課題で忙しくて」

「なんだ、残念」

「一応言っておくけど、先輩だからって奢らないよ」

「違いますよ〜、でも財布に余裕があれば期待しておきます」

どうにか話を逸らして、総一は加藤の方に向き直る。彼もそれだけで機嫌を損ねるほど子供ではない。けれどそれも積み重ねればまた別の話だ。彼の眼差しは、どうして何も言わないのかと訴えている。

彼にとってこの空間は、やはりそれほど居心地のいい場所ではないのだろう。

「ありがとうございました。もう少し粘ってみます」

やる気が削がれたのか、加藤は早々に帰り支度を始める。総一は彼に何か声をかけようとしたが、この場にいる全員を満足させられる言い回しは出てこなかった。総一自身も自分の原稿用紙の束をしまい、帰り支度を整えた。

「先輩って、いまどき紙で書いてるんすね」

ふとそんな言葉を漏らし、加藤は焦って頭を下げた。

「自分でも面倒なやり方だと思うよ。高校の時に尊敬していた先輩がいて、そのやり方を真似ただけなんだけれど」

「いつも、持ち歩いているんですか？」

「キリのいいところまで書いたら家に置いてるよ。でも前のページを見比べながら書く時もあるから、結局書き終わるまではほとんど持ち歩いているんだだけど。それに、手許に置いておかないと落ち着かないものもあるから」

部室を出て行く前に、残っている部員たちに声をかける。彼らはそれぞれ、気のない声やおべっかを使う時のような声色で返答した。

部室棟を出ると、電車の時間が危ないという加藤はすぐに駆けていった。

一人になって帰途を歩きながら、総一は先程の部室の光景

を思い出した。

目の前で談笑する彼女たちのように、総一は何気ない時間を笑って過ごそうとは思えない。心底から笑うことも、周囲と同調して見せることもできず、全てその場しのぎでしかできない。

だからと言って加藤のように、そんな部員たちに嫌悪感を抱くことはなかった。改善すべきとは思うが、それも部長としての立ち位置から生じる義務感でしかない。

総一は部長という立場から、後輩に話を聞かれることも多くどちらの側に属しているという立ち位置にはいない。それだけに、現在のこの部がどんな在り様であるかは俯瞰(ふかん)できた。

だからと言って、総一は何もしない。解決する手段を知らない。知っているのは精々、どちらの意見にも耳を傾ける仲裁役とは名ばかりの、ただの緩衝(かんしょう)材を演じることばかり。滑稽なものだ。

煮え切らない部長の態度を、彼らがどう評価しているのかは総一自身聞いたことがないが、聞かなくてもある程度の予想はついている。総一のこの部での最大の役割は、さながらサンドバッグみたいなものなのだから。

それでも総一は現状から逃げなかった。つまるところ、興味がなかった。他人が真面目に活動していようがいまいが、総一にとってはどうでもよかった。けれど、自覚した上で何もしようとしない自分の存在だけには、はっきりと憎しみを向けていた。

ふと以前に七瀬へ向けた問いを、総一は自身に問いかけてみた。答えはわかりきっているが、それでも自分を誤魔化して、未練がましく部活という場所に残り続けていた。彼女が受験した大学の、名前が同じだけのこの部に、絢辻沙耶という女性がいた訳でもないのに。

家路に就く前に、大学から歩いて三十分ほどかかるスーパーに立ち寄った。そんな場所に足を伸ばさなくても、近所にも同じチェーンの店舗はあった。けれど総一は普段の買い物でアルバイト先に行こうとは思えなかった。誰に揶揄(やゆ)される訳でもないが、なんとなく億劫(おっくう)になって足が遠のいた。

総一が野菜のコーナーを物色していると、突然声をかけられた。

「神木君、だったかな？」

聞き慣れない中年男性の声に思わず顔をしかめたが、声の主を見てはっと息を呑んだ。目の前に現れた背広姿の男は、沙耶の父親であり、鈴の義父である男だった。

「どうも。お久しぶりです」

「いや失礼。後姿だったものだから自信がなくてね」

絢辻氏は白髪交じりの髪の毛に手を当てて目を細くする。

まだ四十半ばのはずだが、外見は年齢以上に年老いて見えた。
「いつも娘が世話になっているね。君に勉強を教えてもらうようになってから、あの娘も成績が伸びているようだ」
「いえ。以前に家庭教師のアルバイトをしていた延長のようなものなので」
「そう言ってもらえるとこちらも助かるよ」
絢辻氏は総一の手に提げたかごを見て、今日はお礼に私が支払うよ、と申し出た。総一は手を振って遠慮したが、いいからと聞き入れる様子はなかった。
「昨年までは部活だなんだとやる気を出していなかったようだが、今はちゃんと現実を見て頑張っているようだ。やはり親がとやかく言うよりも自主的にやる気を出した方がいいらしい」
総一は精一杯の愛想笑いを浮かべた。
絢辻氏が教育熱心な父親だということは、鈴からも聞いていた。穏やかな口調だが、勉強以外の活動をぞんざいに扱っていることは容易にわかった。
「この調子なら君と同じ国立の大学に行けそうだと、先生も仰っていたよ。なんだかんだと言っても、将来のためにも学歴は必要だからね。義理の娘だといっても、今勉強しなかったことを後悔して欲しくはないと思う親心は必要だと思うんだよ」
「そうですね」
総一は口の端を吊り上げて、どうにか表情を保った。
絢辻氏の言う国立の大学というのは、総一が通う大学であり、沙耶が受験した大学のことを指している。県内で最も偏差値の高い大学だったが、成績優秀だった沙耶にはそれほど難しくはないだろうと言われていた。けれど当の本人は、その大学に通うこともなくこの世を去った。
頬を緩める絢辻氏を、総一は笑みを浮かべながらその瞳で見据えた。
「そういえば、どうしてこんなところに？　絢辻さんの家はこっちの方じゃないですよね」
「仕事の都合でね。どうせ車だから、たまには普段とは違う場所で買い物をしていただけだよ」
「家庭のことはいつも絢辻さんが？」
答えるまでに、一瞬の沈黙があった。
「普段は妻がしてくれているが、それほど家事の巧い女性ではないものだからね。私も週に何回かは貢献しようと、こうして仕事帰りに主婦気分を味わっているんだよ」
「家族想いですね」
その後も他愛のない会話を一言二言交わし、絢辻氏は総一の分の会計も支払った。絢辻氏は送っていこうかと言ったが、総一も流石にその申し出は辞退した。

「あの」
車の扉を閉めようとする絢辻氏に向かって、総一は自分でも意識せず声をかけてしまった。
自分は何を言おうとしたのだろう。沙耶の自殺のことだろうか。それとも鈴のことか。咄嗟(とっさ)に出た言葉の先は、喉元を滑り落ちて消えてしまった。
「今日はありがとうございました」
絢辻氏は相好を崩し、こちらこそと言ってから扉を閉めた。
エンジンの地響きのような音を耳に残して、総一は夕闇に陰る駐車場で一人、深々と溜め息を吐いた。
総一はない交ぜになった感情を胸に抱えながら、家路に向かって踵(きびす)を返した。そしてまた、疲れた吐息を漏らした。
「やっぱり先輩も調べていたんですね」
音もなく現れた七瀬は、ほくそ笑むように唇を歪めた。
「何も調べてないよ。あの人と会ったのもただの偶然だ」
構わず歩き始めると、七瀬はその後を着いて来た。帰る方向が同じなのだから、当然といえば当然だが。
「君こそどうしてこんな所に。家は反対方向だろ？」
「偶然見かけたのでつけてきました」
悪びれる様子もなく言った。
「どんな偶然があれば、家や大学と反対方向に来るのか教えて欲しいけどね」
「少し野暮用があったもので」
総一はこれ以上の情報を話す気はないと悟った。偶然と言えば、総一が三十分も歩いて食材を買いにスーパーを訪れたのも、絢辻氏が同じ店に立ち寄ったのもただの偶然だ。七瀬にしてみれば、総一に責められる筋合いはない。
「鈴ちゃんも可哀想ですね」
「何が？」
「教育熱心な父親、それも生まれつきなら諦めがつきますけど、母親の再婚相手が勉強しろと口うるさく言ってくるなんて。それも死んだ娘と同じ進路を押し付けてくるんでしょう。私には耐えられなくて、死にたくもなるかもしれませんね」
西日に照らされた七瀬の顔が、総一の表情を覗き見る。
「詮索が過ぎるのもどうかと思うよ」
「疑って可能性を潰していくしか、私にできることはないですから」
後ろを追ってくる七瀬の足音が聞こえなくなる。飄々(ひょうひょう)とした口調に反して、その瞳はまったく笑っていなかった。
「四年も前の事件、それもただの自殺なんて、そのうち誰も思い出さなくなる。糸口が何もかも消えてしまう前に、私は犯人を見つけるつもりですよ」
「沙耶先輩を追い詰めた犯人――そんな人間がいるとしてだが、その相手を見つけて」

「殺す」
熱気が薄れ、気味の悪い冷たさに満ちた空気に包まれる。七瀬の表情は、落ち着き払った微笑のまま時間を止めていた。
「勿論、証拠があればですよ。ただ私は、本当のことを知らないままなのが我慢ならないだけですよ」
総一は目を伏せて、そのまま歩き始めた。

長く続く白い壁が、歩く者から方向感覚を奪っていくようだった。
美術部の展示を見に行くという、絢辻鈴との約束にはまだ一時間ほど早い。総一はその間、美術館を散策していた。慣れない館内を、ただ目的もなく散策する。絵にまったくの興味がないということはないが、特にアテがあった訳ではない散歩は思いの外時間を潰してはくれなかった。
結局は一足先に、母校の美術部員が描いた絵が展示されている区画へ向かった。
「あれ、神木先輩？」
静寂な館内には似つかわしくない、はつらつとした声に引き留められる。振り返ると、総一よりも少しばかり背の低い女子が立っていた。
声の主の名前を口にしようとして、声が詰まる。目の前にいる女子が誰なのか思い出せない。茶髪や耳のピアスなど、特徴として覚えていそうな要素を探すが、記憶と結びつかない。
「わかりません？　まあ無理ないか。高校の時は髪も黒かったし地味な眼鏡もかけてたし。部活の後輩だった高梨です」
「ああ、高梨さんか。全然違ったから驚いたよ」
総一は笑みの裏で胸を撫で下ろす。名前を聞いても、高梨という後輩のことを詳細には思い出せなかった。そんな名前の後輩もいた、というぐらいの記憶しかない。第一彼は卒業して以来、絢辻沙耶以外に覚えている高校の知り合いなどほとんどいない。精々が同じ大学に進学して、覚えていないと角が立つ相手ぐらいだ。
「そういえば神木先輩って、葉月の知り合いなんですか」
「葉月？　ああ七瀬さんか。同じ大学で一応は同じ部活の後輩」
「ああなるほど、それで」
高梨は一人納得したように頷いていた。
「七瀬さんと知り合いだったの？」
「中学まで同じ学校だったんで。この前久しぶりに話したら神木先輩の話が出たから驚きましたよ」
「僕の話って、何の話をされてたんだ」
「……聞きたいですか？」
遠慮交じりに聞いてくる高梨の様子を見て、総一は追及す

るのを止めた。七瀬のことだ。少なくとも褒められるような話じゃないことは窺えた。
「神木先輩はよく美術館とか来る人でしたっけ？」
「ちょっと人と約束があってね。高梨さんは絵画とか好きだったの？」
「私、美術部も兼部してたんで、今日は後輩の展示を見に来てたんですよ」
そうなんだ、と相槌を打ちながら総一は頭を悩ませた。総一の一学年下の美術部員ということは、三つ後輩にあたる鈴のことも知っているかもしれない。そして総一と絢辻沙耶の関係も少しは知っているだろう。
余計な邪推は避けるべきかと考えたが、すぐに胸中でかぶりを振る。
「絢辻鈴っていう、今三年生の女の子知ってる？」
「え、まあ後輩ですから知ってますよ。ええっと、彼女は……」
「沙耶先輩の義妹だろ。知ってるよ。今日はその絢辻鈴さんと約束があるんだから」
その言葉に驚いた彼女は、怪しむように目を細めて露骨に声を潜めた。
「まさか、絢辻先輩の義妹だからって理由で手を出してるとか……」
「そんなんじゃないよ。彼女と付き合っているのは本当だけど、沙耶先輩はただ知り合ったきっかけに過ぎないよ」
「意外ですね。先輩はてっきり絢辻先輩みたいな人がタイプかと思ってました」
「あの人を尊敬はしていたけど、そういう見方はしてなかったよ」
「まあ、全然雰囲気違いますしね」
腕時計を一瞥するが、やはりまだ時間には早いようだ。
「学校での鈴ちゃんは、どんな感じだった？」
それまでの高梨の陽気な表情が、歯切れの悪いものに変化した。
「私は一年生の頃のことしか知らないですけど、人と打ち解けるのはあんまり上手くないですね。美術室でも一人でいることが多かったし……でもいじめとかはなかったですよ！」
大げさに手を振って否定する。驚きというよりは、予想通りだった。最初の一ヶ月は、総一と話している時もほとんど表情を変えなかった。彼女と付き合うようになった今でも、多少のぎこちなさは残っている。
「どちらかと言えば私は、文芸部の方が大変でしたよ」
総一は小首を傾げた。自分の所属していた部活に揉め事があった記憶など、まったくなかった。
「あ、先輩は引退してから部室にはほとんど来なかったから、あまり知らないですか。絢辻先輩が自殺した後しばらく、部

の空気は結構悪かったんですよ」
思い出すように語る高梨の口元が、次第に引きつっていく。
「絢辻先輩って自由気ままな雰囲気で、それで小説の才能もあって。僻(ひが)みというか疎(うと)んでいる部員も何人かいたんですよ。勿論、本人の前では言いませんでしたけど。そういう人たちがあの事件をきっかけに、それまで腹に溜(た)め込んでいた愚痴を公然と言うようになったんですね。そしたら神木先輩みたいに絢辻先輩を慕っていた人達と口論になって。死んだ人の悪口なんて言うものじゃないですから余計に」
けれど、と高梨は言葉を濁した。それまではまだよかった、と。
「その口論を機に、みんな個人の愚痴を言い出すようになって。積極的に活動しない人たちへの暴言とか、説教臭いことを言って部の雰囲気を悪くしているとか。もう途中から、絢辻先輩の話題なんてほとんど関係なかった」
活動に積極的でなかった部員の何人かは、その諍(いさか)いを機に部を辞めたという。沙耶が死んでから、総一はほとんど文芸部に関心を抱いていなかった。卒業前には顔を出したが、部員が減っていたことを気にかける余裕すらなかった。
事情を説明し終えた高梨は、何かを考えるように口を押さえ、囁(ささや)くように声を潜めた。
「絢辻先輩の自殺、いじめが原因、じゃなかったですか？」
「いじめ？」
「自殺の理由、いまだにわかってないんですよね。もしかして部の誰かが……」
「そんな訳がない」
自分のものとは思えない、冷たい声が漏れ出ていた。高梨が戸惑うのを見て、総一はすぐに柔和な笑みを繕った。
「沙耶先輩は嫌がらせで自殺するようなたまじゃないよ。警察だって散々調べていたんだ」
「それもそうですよね」
ふと一瞥すると、立ち尽くしていた鈴の姿が目にとまる。鈴は目が合うとすぐに応じたが、視線は遠慮がちにさまよっている。
「まだ三十分も前なのに、早いね」
「いえ、むしろお待たせしてしまってすみません」
高梨の方に向き直ると、どうも、と一言だけ添えて頭を下げる。高梨も総一の時のように親しげではなく、軽く声をかけただけだった。
それを機に高梨は別れを告げて、総一たちとは反対方向に歩いていく。
「高梨先輩、お知り合いなんですか」
「彼女、文芸部も兼部していたから」
「そうだったんですか……」

「あんまり仲は良くなかった？」
「良い悪いというより、あまり話す機会がなかったので」
それ以上は聞かなかった。高梨の言うように、いじめや軋轢がないからと言って、誰もが仲がいい訳ではない。
美術部の展示は、二階の階段を上がってすぐの、四角く切り取られたようにへこんだ区画にあった。少しの汚れでも目立つ白い壁に、何枚もの絵が飾られている。多くはないが、総一たち以外にも数人の観客がいる。
「いじめは本当になかったんですか？」
足を止めて、鈴が呟いた。
「聞いてたのか」
「すいません。でも総一さんがないと断言しているのが気になって」
「根拠がある訳じゃないけどね。でも所詮は高校生の悪知恵だし、集団の犯行なら何かしら証拠は残ってててもおかしくない。警察が動いてまったく糸口が掴めないとは考えにくいよ」
両手を結んで思案する鈴は、なにやら次の言葉を探しているようだった。
「その、沙耶さんが飛び降りた屋上って、その、何か証拠になるようなものってなかったんですか」
総一は首を傾げた。鈴が自分から沙耶の自殺について触れることが、今まであっただろうか。
「ああ。あったのは彼女の鞄と靴と、何も書かれていない原稿用紙だけだった」
「その原稿用紙の意味は、親しかった総一さんならわかるということはないんですか」
「残念ながら。精々考えられたのは、誰かを糾弾するような行為が憚られたか、若しくは何も書く必要がなかったかぐらいだ」
「何も書く必要がなかった？」
「本当は僕たちが疑っているような理由なんてなくて、ただ飛び降りたってこと」
「そんな風に命を投げだす人が、いるんでしょうか」
「わからないけど、沙耶先輩ならおかしくないと、僕には思えた。それにその方が、誰も傷つかない」
どうして、と無垢に疑問の眼差しを向ける少女を見て、総一は苦笑した。
「加害者も被害者もいないなら、これ以上誰も不幸にはならない」
その言葉を聞いた鈴は、胸のつかえが取れたように安堵していた。
「今日はどうしたの？　いつもはこんな暗くなる話をすると、すぐに気を回して違う話題を探そうとするのに」
冷やかすように言うと、慌てふためいてすいませんと謝っ

た。
「私もやっぱり気になって改めて部屋を調べてみたんです。父の日記の様なものが見つかったので読んでみたのですが」
「……どうだった？」
鈴は目を伏せて首を横に振った。
「沙耶さんについては成績や勉強のことばかりで、たまに落ち込んでいたり元気だったりといった様子が書かれてはいましたけど、それだけでした。日付も途切れ途切れで、沙耶さんが自殺した後にはその日記を書いた様子はありませんでした」
「そっか……沙耶先輩のことを調べて、またお義父さんに何か言われなかった？」
「大丈夫です。義父のいない隙を見て少し棚を探しただけなので。ただ、お役には立てそうにないです……」
「いいんだよ。それにこんな証拠探しみたいなこと、いつまで続けていても仕方ない。そろそろ潮時にすべきだ」
「えっ」動揺が、微かな声となって露わになる。
「今になって探しても、四年前にわからなかったことが簡単にわかるはずなかったんだよ。これ以上は鈴ちゃんや家族にも迷惑なだけだから」
「迷惑ではないです！」
咄嗟に飛び出した声の大きさに、彼女自身が最も困惑していたようだ。周囲の目を気にして、身体を縮こまらせてしまう。実際には普段の小さな声に比べて大声だっただけで、先程までいた高梨の方が余程やかましいくらいだった。
「急にすみません。でも迷惑じゃないのは本当です。それに誰かのためを想ってしていることが迷惑なんてことはないですよ」
喉元まで込み上げてきた言葉を、総一はぐっと飲み込んだ。彼は一言だけお礼を言って、ただ頷く。同時に湧き上がって来た胃液が、口の中に嫌な味を充満させた。
「早く絵を見に行こう、と言っても急ぐ必要はないか」
総一は逃げるように先に歩いた。
展示の中には絵以外にも、彫刻やアニメーションのセル画のようなものもあった。風変わりなものがあると目を奪われやすいが、総一はすぐに鈴の絵に注意を向けた。正確に言えば、鈴のものとは知らずに一枚の作品に目を向けざるを得なかった。
「これ――」
それは総一にとって初めて見る絵だったが、そんな新鮮味はまるで感じられなかった。
セピア色にくすんだ背景。地面と空が逆転した世界。それらを繋ぐように頭上から伸びる大樹。
個人のイメージが誰かのものとまったく一致することは有

り得ない。まして絵として表現されたものがイメージと一致することなど有り得ない。

それでも総一には、そこに描かれた景色が沙耶の作品をモチーフにしたとしか思えなかった。

「その、アイデアが上手く浮かばなかなかったんですけど、総一さんが以前に薦めてくれた沙耶さんの本を思い出して。それと、アイデアをもらったことと、いつもお世話になっているせめてものお礼になればと思って……」

鈴の言葉を断片的に耳にしながら、総一はその絵をじっと見続けていた。

「どうかしましたか？」

「昔に沙耶先輩と話したことを思い出して」

この歪な絵を目に焼き付けて、総一は自嘲めいた口調で言った。

「他人が自分と同じ景色を見ることなんてできる訳がないなんて言っていたけど、やっぱりそんなことはなかった」

何のことかわからず不思議がる鈴に、総一は一言ありがとうと呟いた。

その絵をじっと眺めながら、胸中でごめんと呟いた。

4

週に一回のミーティングを終えて、総一はすぐに部室を後にした。文芸部では三年の十一月に行われる学園祭を最後に、部活動を引退する形となっている。

相変わらず部内には、険悪ではないが見えない壁に仕切られたような息苦しさが漂っていた。あと一ヶ月だと自分に言い聞かせて、総一は部室の喧噪から離れた。少しでも余計なことを考えると、なぜこんな場所に拘（こだわ）るのかわからなくなりそうだった。

交差点の赤信号に足を止めていると、ポケットの中で携帯が振動した。部員からの連絡か、アルバイトのシフトの調整に関する連絡か。億劫になりながら相手の名前を確認して、ほっと息を吐いた。

鈴から来たメッセージは、彼女にしては感嘆符や砕けた言葉遣いの文章だった。なんでも以前の絵が賞を取って表彰されたらしい。文面からも彼女が無邪気に喜んでいるのが伝わる。総一は頬（ほお）を緩めて、返信を打った。

祝いの言葉と、今度祝賀会をしようと連絡すると、彼女はまた素直に喜んだ。

溜め息を吐いた後に携帯をしまい、歩道をとぼとぼと歩く。

塗装の剥（は）げたアパートの階段を上って、ドアノブに鍵（かぎ）を差し込むと総一の手が止まった。

鍵が開いている。

息を呑(の)んで扉を開けると、相変わらずの殺風景な光景が広がっていた。知らない人間が見れば何か盗まれたと思うかもしれないが、元々何もない部屋だ。そもそも盗まれるような金品だってほとんどないから、ろくな防犯設備のない安い部屋を借りたのだ。

靴を脱いで部屋を確認したが、やはり荒らされた形跡はない。ただ一つだけ変わっていたのは、原稿を入れた引き出しの鍵がこじ開けられていたことだった。

一応確認したが、中身は何も紛失していない。

机の前に座って警察に届けるかしばらく悩んだが、何も被害が出ていない現状を通報してどうなるものでもない。

そのまましばらく項垂(うなだ)れたが、他に何かするべきことがある訳でもなかった。総一は引き出しから用紙を取り出して、書きかけの原稿の続きを書いた。

「美大？」

ささやかな祝いの場として後日訪れたカフェで、鈴に進路について相談に乗って欲しいと言われた。

優雅なピアノの旋律が流れ、海外製のアンティークが目につく店内の雰囲気も相まってか、鈴は話を切り出すのに一層緊張しているようだった。

「以前は考えてないって言ってなかった？」

「考えていないというより、考えないようにしていたんだと思います。小さな賞をもらったから自惚(うぬぼ)れている訳ではないですけど、やっぱり私は絵を描くことを続けたいと思ったんです」

「応援したいけど、美大の試験なんて大変じゃない？　専門の勉強だって付け焼刃じゃできないだろうし」

「独学ですけど、デッサンや色彩の勉強は毎日やってきました。顧問の先生は美大出身の方だったので、試験に必要なことも教われたと思います。おかげで部の人たちには敬遠されてしまいましたが」

「お義父さんには、もう話したの？」

苦しそうに口を噤(つぐ)んで、かぶりを振った。

「たぶん反対されます。私がちゃんと勉強を始めて成績が上がって、すごく喜んでいましたから。でも話して、説得したいと思っています。今年入学することは無理かもしれませんが、それでも頑張りたいと思ったんです」

隣席の視線を引くほど力強い口調で、彼女は言い切った。

「それで、僕に相談って言うのは？」

「総一さんは、私のこんな思いつきみたいな選択は無謀だと思うでしょうか」

「うん。少なくとも、無計画だとは思ったよ」

ですよね、と鈴は俯(うつむ)いた。指でテーブルの上をなぞって、

それでも諦められないというように拳を作る。
「けどやりたいことがもう決まっているなら、僕に相談する必要なんてない。止めて欲しいか、発破をかけて欲しいかなら、鈴ちゃんはどっちなの？　後者でしょ。なら僕に判断を担わせるような卑怯なことをしちゃいけない」
鈴は躊躇いがちに口を結んでいたが、しっかりと目標を見据えるような力強さを感じさせる瞳で前を見ていた。
総一はメニュー表を出して鈴に差し出す。
「じゃあ今日は、賞をもらったことと新しい目標への前途を祝して、豪勢にいこう」
鈴はいつもの調子で慌てふためいて手を振りそうになったが、今日ばかりは覚悟を決めた様に手を引っ込めて、笑顔で頷いた。
テーブルの上には、小洒落た皿に盛りつけられた甘い匂いのパンケーキだったり、聞いたことはあるが味をよく知らない豆のコーヒーだったりが並んだ。
二人はテーブルに並んだ品々を平らげると、勢いのままに耳になじみのない名前のケーキを追加注文した。出て来た商品の見た目とイメージとの違いに、顔を見合わせて笑ったりした。
この日以来、総一が鈴と会うことはほとんどなくなった。

5

最初は忙しいという曖昧な理由のメールが送られてくるばかりだった。受験を控えているという事情も考えられたが、受験のための勉強を見る日すら都合がつかないというのもおかしな話だった。
数日のうちにその理由はわかった。ある日、総一の携帯に見知らぬ番号から電話がかかってきた。疑問符を浮かべながらその着信に出ると、電話の主はすぐにその理由を教えてくれた。
「娘にはもう会わないでくれ」
電話の主は絢辻氏だった。彼は開口一番にそう言い放った。声には以前顔を合わせた時のような愛想がなく、明らかな苛立ちを滲ませている。
「どういうことですか。事情を教えてください」
理由を尋ねたが、絢辻氏は相手にする気がないのか投げやりな口調になっていた。これ以上娘をたぶらかさないで欲しい、授業料がいるなら後日に払ってやる、と次第に要領を得ない返答になっていった。
そのまま一方的に電話を切られた総一は、手にしたままの携帯で鈴に電話をかけようとしたが、時計を見て踏みとどまった。時刻は四時半。家に帰っているなら絢辻氏も同じ部屋に

いる可能性がある。今の様子では、総一から電話がかかって来たとわかればすぐに携帯を取り上げてしまうだろう。
夜の十一時に、総一は鈴の携帯にメールを送った。もう眠っているかもしれないが、それなら明日にでも返信があるはずだ。
しばらくそのまま机の前に座っていると、鈴からの返信が来た。
『ご心配をおかけして申し訳ありません。三者面談で義父がこの間の賞のことを知って、黙って部活を続けていたことにすごく怒っていて。その時に美大のことをそれとなく話したら、総一さんに唆されたのが原因だと勘違いして……。それであんな電話をかけてしまったんだと思います。ご迷惑をおかけしました』
ぎこちない言葉遣いなのはいつも通りだ。だが今日のそれは余裕がないことの表れに思えてならなかった。
『鈴ちゃんの方は大丈夫なの？　何かあれば言い辛いことでもすぐに相談して欲しい』
しばらくして返ってきた返信は『心配してくれてありがとうございます！　でも大丈夫です』と簡素なものだった。ただそれだけの文章でも、やせ我慢をしている気配は感じ取れた。
それ以上の言葉を次ぐことができず携帯を放り捨てた。総一はたまらず机に拳を打ち付けた。打ち付けるような音の衝撃で、机の上から携帯が落ちそうになった。
「全部、僕のせいだ」
途端に催した吐き気に口を押さえて、総一は洗面台に駆け込んだ。胃酸の匂いが鼻を突き、余計に気分が悪くなる。
鏡に映る自分の顔を見て、総一は鼻で嘲笑した。この数日間が極端に寝不足だっただけで、目はすっかり落ち窪んで見えた。不安や恐怖といった感情が、総一の頬をこけさせているようだった。
まともな言葉にもならない悪態を吐いて、総一は机の前に戻った。引き出しから原稿用紙を取り出し、残り僅かとなった物語の続きをひたすらに書いた。

閉店して一日の仕事も終えた頃、社員の川上が思い出したように頭を抱える。他にバイトに来ていた二人は、そんな気配を知ってか知らずか、早々に更衣室の方へ引っ込んでいったようだった。
「どうしました」
溜め息を吐きながら、総一は仕事場に足を戻す。川上は水を得た魚のように、総一にやり残した仕事の説明をした。結局は終業時間から三十分をかけて翌日の開店準備を終えた。
「あの、今月一杯でバイトを辞めたいって話ですけど」

「ああ、ごめんね。今日は時間ないから細かい話は今度ね」
川上は一言だけ労(ねぎら)いの言葉を残し、事務室の方へと駆けていってしまった。総一は一人残された店内をゆっくりと歩いて後にした。
秋も半分を終えると、涼やかな風に身体を震わせることが多くなった。制服から着替えて外に出ると、ひゅるりと音を立てる風が頬を打ち付けた。虫のざわめきはすっかり鳴りを潜めていた。
駐輪場を出ようとしたところで、ペダルを踏む総一の足が止まる。溜め息を吐く総一の前に、しかめ面の七瀬が目の前に立っていた。
「随分お疲れですね、っていつものことですか」
「また偶然に買い物帰り？」
「買い物ついでではありますけど、偶然ではないですよ」
高架下に場所を移した七瀬は、いつものような冗談めかした口調を抜きにして話を切り出した。
「あと一月で今年も終わりますけど、先輩の方で何か答えは出せそうですか」
「ああ」
「本当ですか!?」
「沙耶先輩の自殺にやっぱり理由なんてない。それが僕の出した答えだ」
七瀬は呆れたように額を押さえ、総一を睨(ね)めつけた。
「そういうのは、答えが出ていないって言いませんか」
「何一つ証拠なんてなかったんだ。彼女にも協力してもらったが、それらしい物証は何も残っていない。ならそれしか答えは出せないだろう。それとも君の方は何か掴めたのか」
「いいえ。高校の関係者をあたってみましたが、目ぼしい情報はないです。一番可能性があった線も、今のところ空振りなので」
「ならそういうことだろう。もうこれ以上証拠探しをしても仕方ないよ」
「先輩の方は本当は何かわかっているんじゃないですか。物証はなくても、鈴ちゃんから何かヒントを引き出せたとか」
舌を鳴らして、出かかった言葉を飲み込む。
「彼女からも何の情報もないし、そんな風に付き合っているつもりもない」
「でも最近、会えていないんですよね」
「……誰から聞いたんだ？」
「少し調べればわかりますよ、それぐらいは。それでその理由はなんですか」
「それぐらいは調べればわかるんじゃないか」
「父親に関係を反対されて？　それで彼女は大丈夫なんですか。自分の思う通りでないからって、暴力的なやり方をされ

ているんじゃないですか」
「何が言いたいんだ」
「残ったのはその線だけで、今まさにその証拠になり得るような状況が起きている。結論を出すのはまだ早いってことですよ」
総一の頭に、カッと血が上った。
「虐待の証拠が挙がるまでこのまま傍観してろって言うのか」
「自殺の原因を確かめるためにはそっちの方がやりやすいかと。少なくとも鈴ちゃんへの虐待が事実なら、その証拠を突きつければ相手も無下には扱えないでしょう。その上で彼女の話を持ち出せば、何かしらの反応が期待できると踏んでいます」
「まるで、こうなることを望んでいたような口ぶりじゃないか」
「否定はしませんよ。偶然とはいえ、私には好機ですから」
七瀬の口元が挑発的に弧を描く。込み上げる怒りに拳の内で爪が食い込む。けれど舌の先まで出て来た言葉は、すんでのところで喉に滑り落ちた。
「沙耶先輩が虐待に耐えかねて自殺したというのは考えにくい」
「どうしてそう言えるんですか」
「あの父親は外面はともかく、学歴に異常に拘るプライドの高いタイプだ。子供を自分の思う一流に育てることを生き甲斐にでもしているんだろう。だから鈴ちゃんに能力以上の過度な期待をして、手を出しているのかもしれない。けど沙耶先輩の場合は別だ。成績はいつも優秀で部活も三年になったら辞めている。自殺を考えてしまうほどに手を上げられる理由がない」
沙耶ならそんな状況でも難なくやり過ごせていると、総一は思っていた。
「まあ私は、あの男から本当のことが聞ければそれでいいので。それさえ叶うなら、方法は先輩にお任せしますよ。付き合いの長い先輩の方が都合のいいこともあるでしょうし」
けたたましい音と共に電車が頭上を通り過ぎる。言いたいことだけ言い終えた七瀬は、立ち去ろうとしてまた足を止めた。
「人がよく喋る時って、どういう時だと思いますか」
けれど彼女は、いつも言わなくてもいいことを付け加える。
「何かを探りたい時か、何かを隠したい時ですよ」

十一月になると、それまで連絡を取り合っていた鈴と話すことができなくなった。電話をかけると、『現在使われていません』という機械音が繰り返される。
その翌日、絢辻氏から電話がかかって来た。前回と同じく、

もう娘に関わるなといった内容だった。しかしその時は、それまでのような体裁を気にした語調ではなく、剥き出しの怒りを言葉にしてぶつけて来た。堂々巡りの話を聞いていても埒が明かず、途中で電話を切った。この日はそれから何度も同じ電話がかかってきていた。きりきりと悲鳴を上げる胃を押さえながら、総一は着信を切った。電源を切らなかったのは、他の電話で鈴が連絡してくると思ったからかもしれない。

電話の前で、総一は何度もごめんと独りごちた。けれど口にする度に、言葉は嘘くさくなり罪悪感すら薄れていくようだった。

それから二週間余りは、部活やアルバイトの引き継ぎ業務に追われた。アルバイトに引き継ぎ業務なんてあるのかと総一は疑問に思っていたが、話をしてみると自分だけが行っていた業務の多さに呆れた。自分にしかできない仕事だったならまだ納得もできる。だが手際こそ悪いが、教えるとすぐに他のアルバイトもこなせるようになった。そんなものかと、最後の出勤日に再度自覚させられた。結局、退職できたのは予定よりも一ヶ月後ろ倒した頃になっていた。

十二月に差し掛かると、布団から出るのが憂鬱な時期になった。ただ最近は、毎日のようにやって来る吐き気に催促されることが多くなったせいで、漫然と横になっていることもできない。

気分の悪さを訴える頭を押さえて、総一は携帯を開いた。日付を確認してから、七瀬に電話をかけた。電話に出た彼女は、総一の申し出に迷わず了承した。

午前中の間、総一は鞄から原稿用紙を取り出して、書きかけだった小説を完成させた。当初の予定とはだいぶ違う筋書きとなっていたが、最初のプロット通りに作品が完成することなんて元々ほとんどなかった。

総一が家を出たのは、午後三時を回った頃だった。周囲は就職のための勉強や説明会への参加に忙しなくなっていたが、総一は何一つ手をつけていない。そんなことを考える必要は、もう総一になかった。

電車に乗って三つ隣の駅に向かった。最寄り駅にある築数十年の高校は、見てくれこそ古いが県内でも有数の進学校だ。有数と言っても、他に競争校がないだけでもあったが。

母校であるその高校の校門前で、総一は腕時計をちらちらと眺めながら出てくる生徒の顔を確認した。

久しぶりに見た鈴の顔は、少しやつれて見えた。勉強やプレッシャーのせいか、体調の悪そうな生徒は鈴以外にも何人かいる。それでも事情を知っている総一には、憔悴した彼女の表情は異質なものに見えた。

総一の姿を確認すると、鈴は慌てて首を回して周囲を確認した。絢辻氏の姿はないし、流石に毎日迎えに来ているなん

てことはないはずだ。それでも彼女は、その可能性を危惧(きぐ)しているようだった。
軽く手を挙げて居場所を示すと、鈴は小さな歩幅で駆け寄ってきた。彼女は遠慮がちに注がれる生徒たちの視線を避けるように、手近な民家の陰に総一を引っ張った。
「何してるんですか!?」
「何って、誘拐かな？」
鈴は呆れたように目を丸くした。こんなに容赦のない彼女の反応を見たのは初めてで、その反応が可笑(おか)しくて総一は思わずくすっと声を漏らした。
「とりあえず場所を変えよう。学校の近くじゃ落ち着いて話しにくいだろうし」
鈴を連れて電車に乗った総一は、絢辻の家とは反対方向にある自分のアパートの最寄り駅に降りて、手近な喫茶店に入った。
とりあえずに注文したカフェラテが、甘ったるい香りと共に総一の前に置かれる。鈴の方には墨を入れたように濃い黒色をしたブレンドコーヒーが置かれる。
「あの、早く帰らないと怒られてしまうので……」
「それなら大丈夫だよ。今日は帰らなくていいから」
「あの、どういうことですか？」
「家に帰りたくないなら帰らなくていい。今日は僕の家か、それとも知り合いの女の子の家に泊まってもらおうと思って。勿論(もちろん)嫌なら断ってもらっていいから」
鈴はぽかんと口を開けたまま固まっていた。その言葉に驚いたからというよりも、総一があまりにあっけらかんとした口調だったからだろう。
「なんで、今になってそんなこと言うんですか」
涙混じりの声になって、俯いたまま呟く。
「ごめん。片付けないといけないことがあったから」
彼女は何かを言おうとしたようだが、言葉よりも先に嗚咽(おえつ)が漏れて、そのまま顔を覆ってしまった。近くの席にいる女子大生やサラリーマンの視線が遠慮がちに注がれる中、総一は鈴を連れてカフェを出て、自分の部屋に向かった。
しばらくうずくまるようにしていたが、しばらくしてようやく落ち着いた鈴は、溜め込んでいたものをここぞとばかりに吐き出した。
途切れ途切れな喋り方だったが、事情はすでに聞くまでもなかった。美大への進路変更の話が絢辻氏の逆鱗(げきりん)に触れ、鈴は学校以外への外出をほとんど許されなくなった。説得すると言った鈴の言葉も虚(むな)しく、絢辻氏は鈴を部屋に閉じ込めてひたすら勉強に打ち込ませた。それからも何度か進路の話を切り出したというが、その度に怒鳴られ、ぶたれた。
見たところ鈴の顔にその跡はない。傷を確認させてもらえ

るかと頼むと、鈴は頷いて制服のリボンをほどいた。肩の付け根から肘にかけた辺りに青痣ができており、背中や腹部にはほとんど見分けがつかないが、僅かに赤く腫れているように見えた。それだけのことに気を回す理性は残っていたようだ。絢辻氏は時折我に返ったかのように謝罪することもあったらしいが、計算してのことであっても病的なものであっても質が悪い。

ワイシャツを羽織り直した鈴は、腕を押さえながら必死に声を搾り出した。

悪化したのは肉体的なものより精神的なものだった。成績が伸び悩めば食事も制限された。家にあった画材は捨てられ、見せしめのように絵を燃やされたこともあったという。携帯を取り上げたのも、逆らう気力を少しでも奪うための手段だったのだろう。総一から連絡が来る度に、鈴は罵声を浴びせられた。

彼女が抵抗する気力を失くしても、あまり改善はなかったという。暴力的な手段がなくなっただけで、監視されるような生活は終わらなかった。

鈴に手を上げる時、絢辻氏は取り乱したようにいろいろな言葉を口走っていたらしい。

「どうしてそんなに馬鹿なんだ。あの娘といい、どうして誰も言うことを聞かないんだ。義父は苛立ちながらよくそんなことを言っていました。そうだ、それから能力があっただけあの娘の方が余程マシだったとも――」

淡白な口調で滔々と語る彼女を、総一はそっと抱き寄せた。鈴は身体をぴくりと震わせたが、すぐに力を抜いて総一の背中に手を当てて抱き寄せた。

「もういいから……ごめん」

抱き寄せた手にぐっと力が込められる。

ひび割れるような音がどこからか聞こえた。塗装した壁が剥がれ落ちていくような音だ。総一だけに聞こえるその音は、やがてガラスが砕けるような硬質な音を立てて、止まった。

窓の外はすでに夕闇に覆われていた。空に浮かぶ白い月のか細い光が、僅かに街並みを照らしている。

「こんな時に聞くことじゃないんだろうけど」

放り出した服を着ながら、布団の中から顔だけ覗かせる鈴に問いかける。

「沙耶先輩も君と同じようなことをされていたのかな」

「義父の口ぶりから、何か気に障るようなことがあったのかもしれません。けど優秀だった沙耶さんにそれほど癇癪を起こすとは思えませんでした」

もう三年以上前の出来事の証拠を突きつけることは、やはり不可能に等しかった。

「気を遣ってくれたみたいでごめんね。それだけで十分だ」
「もしかして総一さんは……何か知っているんですか？」
総一は唐突な質問に目を丸くする。彼女がどうしてそんな発想に至ったのか、まるで理解できなかった。
総一が黙っていると、鈴は覗かせた顔をひょいと下げて謝った。
「変なことを聞いてすみません。でも総一さん自身が、あまり沙耶さんの死因について知りたくないように見えてしまって」
勘違いだったらすみませんと、鈴は重ねて頭を下げる。総一は素気無くやり過ごすことができたはずだった。けれどこれ以上、彼女にいけしゃあしゃあと嘘を重ねていくことが、彼は耐え切れなくなりつつあった。
「以前に言ったことを覚えている？」
「自殺した理由なんてない方がいい、ですか」
総一は頷いたが、その後は何も語らなかった。
廊下に出て冷蔵庫を開けるが、缶ビール以外には水もろくに入っていない。
「ちょっとコンビニで飲み物を買って来るよ」
「でも……」
「家の方はこっちで誤魔化しておくから。そのために七瀬さん――以前僕と一緒に家にお邪魔した彼女にも事情を話して協力してもらうけど、いいかな」
「あの、はい……」
引き留めようとする鈴を背にして部屋を出る。まだ七時を回ったばかりだが、玄関を出ると足場すら覚束ない暗闇が広がっていた。
総一はポケットに忍ばせた携帯電話を取り出し、七瀬を呼び出した。
「計画について話がある」
『……直接会って話した方が早そうですね』

総一の住むマンションの近所にあるチェーンのファミレスで、総一と七瀬は向かい合って座っていた。半年ほど前のような繕った笑みは失われ、互いに落ち着き払った表情で対面する。
「鈴ちゃんの件はわかりました。適当な理由をつけて私の家に泊まるという旨を電話しておきます」
「助かるよ」
「それで計画についてというのは？」
七瀬は値踏みするように総一の目を覗き込む。
「絢辻氏の鈴への虐待はわかったが、沙耶先輩については謎のままだ。現状ならなんとでもこじつけられるが、沙耶先輩が自殺したから偏執的な人間になったと考えた方がむしろ納

得できる」
「そんなこと本気で思ってるんですか？　あの男が義理の娘に手を出している屑だって事実は変わらないんですよ」
「その通りだけれど、それだけだ」
唇を噛みしめた七瀬が何かを言いかけたところで、テーブルの脇に置いた携帯電話が振動する。
「ちょっと失礼します」
メールだったのだろう。七瀬は画面を確認すると、放心したように動きを止めた。
「どうかした？」
総一の方をじっと見据えた七瀬は、何を言うでもなく携帯を鞄にしまった。
「……いえ、なんでもありません」
「話を戻すけど、絢辻氏が沙耶先輩を殺した証拠はない。この件については、もう考えないようにしていくべきなんだろう」
「神木先輩はそれで納得できるんですね？」
「納得も何も仕方ない。追い詰めたかもしれない、そんな曖昧な理由で人を殺すことなんてできないだろ」
七瀬は渋々首を縦に振った。躊躇なく殺すとまで言った人間にしては、彼女は抗弁することもなく悠々とコーヒーを飲んだ。
「けれど僕は、あの男を殺すことになるかもしれない」
「はい？　さっきは曖昧な理由で殺人はできないって言いませんでしたか？」
「ああ。沙耶先輩の件に関しては証拠はない。けれど絢辻鈴の件に関しては違う。明確な根拠がある」
「口先ではどう言っても、先輩はなんだかんだと彼女を利用しているものだと思ってましたが……情でも移りました？」
「……そんなところだろうね」
総一は手付かずだったコーヒーを一息に飲んで席を立ち上がる。
「明日は土曜日であの男も家にいるだろう。家に行って話し合ってから殺すかは決めるつもりだ。君も同席すればいい。そこで沙耶先輩のことも探りを入れられるだろうからね」
「わかりました。では明日の昼に絢辻の家で」
二人分のコーヒーとテイクアウトの料理の会計を済まして、総一は先に店を出た。夕食を済ませていくからと言って残った七瀬は、総一が席を立つと携帯電話の画面を注視していた。
腕時計に目をやる。家に帰ってからでもまだ時間の余裕はある。
――やるべきことは全て終わった。後は最後の一手を実行するだけだ。

6

布団の中で寝息を立てる鈴を確かめてから、総一は外出用のコートを身にまとう。〝必要な物〟を鞄にまとめてから、一筆添えて机の上に原稿用紙の束を置いた。

駅で電車を待っているのは、総一だけだった。終電にはまだ少し早いが、電車にはまばらにしか乗客はいない。目的地に着くと、誰もいないホームに総一だけが一人立っていた。

都市部から少し離れただけで、人の営みを感じさせる光が乏しくなる。仄白(ほのじろ)い月明かりと断続的に続く街灯の灯りを頼りに、総一は夜道を進んだ。

漏れ出す息が白い霧となって空気に溶けていく。雪でも降っていれば風情(ふぜい)も出るというのに。そんなことを考えながら、総一はコートに忍ばせた獲物を手で確かめる。

「こんな時間に散歩ですか」

駅を降りてすぐの道端に、数時間前に別れたばかりの七瀬がいた。石垣に背中を預けていた彼女は、総一の姿を認めると真っ直ぐに彼を見据える。

「やっぱり一刻も早く事態を解決するべきだと思い直したんだよ」

「こんな夜更けじゃ絢辻さんの家も迷惑じゃないですか？」

「迷惑とか、もう言ってる場合じゃないんだ」

「それで、そんな物騒なものを持って話し合いを？」

思わずコートのポケットから手を出して、総一は舌を打つ。

「……本当に持ってたんですね」

「君は嘘が上手いね。僕とは大違いだ」

ポケットから折りたたみのナイフを取り出して見せる。

「殺すかはまだわからないんじゃなかったんですか？」

「それも、気が変わったんだ」

彼女が口を噤(つぐ)むと、忽(たちま)ち音がなくなった。しなびた住宅街は十一時にもなると夜に沈んでしまっていた。

「僕が捕まった後は、少しの間彼女のことを頼むよ。君にも警察やマスコミが来るだろうけど、騒ぎを大きくしないように配慮してやって欲しい」

ナイフをポケットに戻して、総一は絢辻家へ向かおうとする。だが七瀬はひょいと身体を前に押し、彼の歩く道を塞いだ。

「捕まる前に一つだけ聞かせてくださいよ」

持っていた鞄に手を入れた彼女は、そこから何枚かの原稿用紙を取り出した。

「どうして沙耶ちゃんの遺書を隠したりしたんですか？」

×　×　×

誰も残っていない教室で、総一の叫び声がこだました。
「もう書かないって、どういうことですか！」
「言葉通りだよ。部活も辞めたし、区切りをつけるならここらが丁度いいかなって」
三年生に進級した沙耶は、突然部活を辞めた。詰め寄る総一に対し、沙耶はいなすような口調でまともに取り合おうとはしなかった。
「そんなことより、今度の休みに遊びにでも行こう。思い返せば去年の間は一度もそういう機会はなかったし、私も勉強の息抜きに丁度いい」
総一はじっと彼女を睨みつけていた。
「受験もあるから、区切りに部活を辞めるのはわかります。だからって二度と小説を書かないなんて――」
「飽きたんだよ」
突き放すように感情のない声で彼女は言った。その瞬間、総一の喉を堰(せ)き止めていた何かが外れた。
彼女の言葉など耳に入っていないように、総一は胸中を叫んだ。どうして辞めるのか、そんな才能があるのに、それだけ人を魅了する力があるのに。そんな言葉を立て続けにぶつけた。
「だからそういうのが、飽きたんだよ」
西日で赤く染まった彼女の顔は、その色に反して酷く冷めたものに見えた。
思えば総一はこの時初めて、絶望という感情を覚えた。気に入らないものへの苛立ちでも憎悪でもない。逆光に照らされていたものが、その正体を見た瞬間に醜いものだと理解してしまったような落胆。道標(みちしるべ)を失くしてしまったような喪失感。
けれどその時の感情はまだ、一過性の衝撃がもたらした流行り病のようなものでしかなかった。それはすぐに光を取り戻して、足元を照らしてくれた。
それが本当の絶望に成り果てたのは、翌年の冬が終わる頃、彼女の遺書を見た時だった。
雪の降る屋上で打ちひしがれた彼は、その時決心した。絶対に、彼女が死んだ理由だけは隠し通さなければならない。

×　×　×

漫然と過ぎ去った三年の後、転機は突然に訪れた。この日七瀬が接触してこなければ、きっと総一はこのままただ朽ちていくのを待って、死んでいったのだろう。

凍えるような夜風に当てられながら、つと頭の中で今日一日の出来事を反芻していた。大学からアルバイト先に向かい、また誰にでもなく向けられた愚痴を受けて、一人夜道を歩く。一日の回顧はものの数秒で終わった。大学二年生の一年間は、思えばそんな時間を繰り返しただけで終わっていた。時間は容赦なく、秒刻みに過ぎ去っていく。

「お疲れ様です。今日も一人ですね」

目の前に現れた、レジ袋を携えた女は、陽気に嫌みな言葉をぶつけてくる。一年生の七瀬は、入部した時からこの自由気ままな態度を貫き、それ故に部内の同級生には疎(うと)まれている節がある。とは言っても、本人はそのことをまったく気にかけている様子はなかった。

正直、気の合わない人種だと思った。そんな相手とそれなりに親しげに話しているのは、同じ部活だからでも近所に住んでいるからでもなく、絢辻沙耶という共通の知り合いがいたからに他ならない。

「今日も大変のようでしたね」

「何のこと？」

「アルバイト。不真面目な同僚に振り回されてその尻拭(しりぬぐ)い」

「わざわざ見に来たのか」

「嫌みを言いに来たみたいに言わないでくださいよ。この店は私のマンションとも近いし、一人暮らしの学生が特売品を求めてやってくるのは不可抗力ですよ」

そうですか、と降参の合図。お気に召したらしく、彼女はにやりと唇を曲げる。

会話が途切れ、総一はただ前方の信号にだけ注意を払って歩いていた。何かを考えようとしていたが、身体に溜まった疲労がそれを邪魔する。

不意に脇腹を小突かれて、意識が現実に戻る。見ると七瀬は、少し機嫌が悪そうだ。

「神木先輩、聞いてますか」

「ごめん。今何か言っていた？」

「いいえ、何も。今から言おうとしてました」

なら怒られる筋合いはないのではないか。ぼうっとしていたのは事実なだけに反論もしにくい。

「それで、何の話だったの」

「今週の土曜日は暇ですか？」

総一は目を丸くした。

「七瀬さんがそんなことを言うのも珍しいね」

「で、どうなんですか」

「……申し訳ないけど、今週は少し忙しいんだ」

正直のところ、彼女と話すのは疲れる。

「もう二月ですよ。試験も終わってますし、何かあるんですか？」

「ゼミの課題とかだってあるんだよ。僕のところは三年生になる前に、ゼミの皆で簡単な研究報告を用意しないといけないんだ」

「でもそれって、神木先輩が必ずしもやらなければいけないことなんですか？」

総一の表情から張り付けていた微笑が消える。彼女はごく普通のことを聞いたというように冷静な面持ち。当たり前だ。彼女はごく普通のことしか聞いていない。それなのに、総一は答えになる言葉をすぐに見つけることができなかった。

「誰かはやらないといけないことだよ」

感心とも呆れともつかない溜め息を、彼女は大仰に吐く。

「先輩はどこでも忙しそうですね」

「心配されるほど忙しい訳でも――」

「そうじゃなくて。先輩はどこでも、期待された訳でもない役割を演じて、苛立って、綻びが見えても繕って。滑稽なピエロみたいなことをしていて大変ですねってことです」

混じりけのない侮蔑と憐憫、そんな感情を込めて彼女が言った。ビー玉のように転がる無垢な瞳が、総一の行いを問い質すように揺れる。

「そう、見えるかな」

総一がすぐに微笑を見せると、七瀬は、ほら、と言わんばかりにほくそ笑む。総一のこめかみを、冷たい汗が流れる。

「確かに昔から、よく言うことを聞いてくれる良い子、というのが僕への評価だったよ。賢いでも何かに秀でているでもなく、ただの良い子。だからせめて、望まれる役割を演じて周囲の期待に応えて見せようとしたんだろうね」

誤魔化すように雄弁に語って見せるが、七瀬は何も言わない。咎めるように鋭い眼差しだけが向けられる。総一は思わず話を続けた。

「でも僕には、それすらできなかったらしい。すぐにボロが出た。陰口も叩かれるけれど、陰口にすら同情が込められる。惨めだよ。ドラマなんかで、周囲の期待通り演じている人間を可哀想だなんて言うことがあるだろ。確かにそうだろう。演じる側もその演技に騙される側も、最終的には誰も得しない。でも演じることすらままならない人間は、ただ滑稽でしかない」

だから絢辻沙耶という女性に憧れた。一人で何でもこなしてしまい、誰にも告げず一人で死ねる人間の在り方に、総一は傾倒した。

「そうなんですか。先輩も大変ですね」

慰めの言葉はどこか空々しい。

「私はその生き方でいいと思いますよ。成功者とか勝ち組とか、効率のいい時間の使い方をさも生きる秘訣のように説く人なんて、見ていても気疲れするだけですから」

下から覗き込むように総一を見上げ、いたずらっぽく歯を見せる。
「だから私には、神木先輩のような人の方が見ていて安心するんですよ」
「成功者でも勝ち組でもない人種を？　いい趣味してるな」
軽い冗談のつもりの返答を否定もしてくれず、より残酷な言葉を返す彼女はいつも通り満足気だ。首筋から見える彼女の肌は、冷たい空気に晒されているせいか異様に白く見えた。
でも、と彼女は足を止めた。踵（きびす）を返し、一転して真剣な表情を見せる。
「そんな空回りばかりしてると、いつか屋上から飛び降りて死んじゃいますよ」
引いていた自転車をとめる。総一と七瀬の間で、屋上から飛び降りるという言葉が何を指すのかは考えるまでもない。
「どういうことだい？」
知らず声が冷ややかに、敵を糾弾（きゅうだん）するような刺々（とげとげ）しさを孕（はら）む。
「神木先輩は、絢辻先輩のようになる必要はないですよ」
思いもしない言葉は、とびきり鋭い刃で刺されたような衝撃を総一にもたらした。拙い言い訳が頭の中から流れ落ち、思考はまったく違う言葉で埋め尽くされる。
「僕が彼女のようになる？　どうしてそんな発想に繋がるんだ」
「絢辻先輩が命を絶った理由。だと言えば、神木先輩にはわかりますか？」
総一の身体から血の気が引いていく。どこからか耳に届いた猫の鳴き声が、虚しく響いた。
「絢辻沙耶。高校では文芸部に入部して、神木先輩の一つ上の先輩。三年生の冬に自殺。自殺した場所は彼女の通っていた学校。自殺現場に残されていたのは、数枚の原稿用紙、それも全て白紙で。当初は生徒たちからのいじめ、若しくは教職員の誰かに脅されていたなどいろいろな憶測が飛び交ったけれど、そんな事実は何一つ確認されなかった。残された白紙の原稿用紙や、彼女が学生時代に書いていた作品、普段からの彼女の不思議な言動も相まって、謎の死として話題になった」
淡々と説明した後、彼女はまたいつもの人を食ったような態度で笑みを作る。
「話の続きでしたら、今週の土曜日に駅で待っていますのでその時に」
彼女は総一の返答を待たずに去っていってしまう。
呆然としたままの総一は、追いかけるという考えすら頭が回らず立ち尽くしていた。
沙耶の死の理由を知る者がいる。その事実が、どうしよう

もない焦りと苛立ちを覚えた。

二月某日の土曜日、正午。総一が七瀬の言われるままに駅にやって来ると、彼女は行き先も言わずに電車に乗った。

窓の向こうにあった頭の高いビルや色鮮やかな看板は姿をなくし、古びた住宅街や小さな田んぼが目立つようになっていく。失われていく色を補うようにか、白い雲の浮かぶ空は次第に鈍色（にびいろ）に覆われ始めた。

移動の途中で、総一にも行き先の見当はおおよそついていた。あと二つ先の駅には、三年前まで彼が通っていた高校がすぐ近くにある。昨日の彼女の言動から察するに、沙耶に縁のある地であることは想像に難くなかった。

「次で降りますよ」

「もう一つ後の駅じゃないのかい？」

「ああ、学校には行きませんよ」

彼女は用意していたように言葉を返す。からかうような軽口はなく、淡々と否定した。

「今から行くのは、沙耶ちゃんの家ですよ」

沙耶ちゃんという耳慣れない呼び方が誰を指すのか、気付くまでにしばらく時間がかかった。それが絢辻沙耶を指すのだと思い至って、またしばらく沈黙した。

「私が昔は沙耶ちゃんの家の近所に住んでたことは先輩にも話しましたよね。でも実際は、沙耶ちゃんとは先輩に話したよりもずっと仲が良くて、よく一緒に遊んでた」

住宅街の塀に囲まれて歩く中で、七瀬は何気なく呟いた。

「昨日はぼかしていたのに、随分あっさり話すんだね」

「来てもらうまでの餌ですよ、餌。沙耶ちゃんの自殺した理由って言うのも、一番引っ掛かってくれそうな言葉を選んだだけですよ」

肩に提げた鞄を一瞥して、総一は胸を撫で下ろした。まんまと餌に食いついた自分を嘲笑しながら、餌を吊り下げられるまでもなく、沙耶の名前が出ていた時点でそれ以上は不要だったろうと思った。

「着きましたよ」

周囲の家々に紛れた古びた家屋だった。石垣の塀の向こうに、ささやかな庭が設けられているが、近時に人の手が加えられている様子はなく、草木が野放図に繁茂している。

総一は表札を見て顔をしかめた。一度だけ訪れたことはあるが、いい思い出はない。

「家の人に連絡は取ってあるの？」

「いいえ。でもこの時間に家にいることは確認が取れているので」

まるで住人の行動時間を把握しているかのような得意げな口ぶりだった。

七瀬が気後れもなくインターホンを押す。機械の乱れた音を通して、しわがれた中年の声が応対する。五年も前のことだが、総一はその声を聞いた覚えはあった。

「子供の時、沙耶ちゃんとよく遊んでいた七瀬葉月です。家にもよくお邪魔していたんですけど、覚えてませんか？」

それを聞くと、相手の男性――沙耶の父親は警戒を解いたように柔らかな声色になる。

程なくして、沙耶の父親が玄関に現れる。薄くなった髪の毛の中に白髪が垣間見え、歳不相応の苦労を湛えているように見えた。

絢辻氏は総一の姿を認めると眉をしかめる。

「こちらは大学の先輩の神木総一さんです。沙耶ちゃんにとっては高校の、部活の後輩でもあったんです」

「ああ。救急車を呼んでくれた子だね。あの時はどうもありがとう」

慇懃に頭を下げられて、総一もつられて同じようにする。名前を聞いて、絢辻氏も懐かしむように目を細めた。

「命日には少し早いですけど、今日は沙耶ちゃんにお線香をと思って。お葬式の時以来、すっかり顔を見せられていなかったので」

総一は残念そうに話す後輩を見やる。七瀬が絢辻家を訪れたのは、彼女が死んで以来はこれが初めてのことであったようだ。

絢辻氏は七瀬の申し入れを快く受け入れて、総一らを家に招き入れた。

玄関の印象よりも、室内は整然としていた。障子を開けて、二人は仏壇の置かれている座敷に通される。

差し出された座布団の上に正座して、沙耶の写真が立てられた仏壇に向き合う。高校の入学式で撮った写真だろう。艶やかな黒髪。柔和な微笑みと切れ長の瞳が、自分ではない漠然とした何かを見透かしているように映った。

葬儀の時以来、総一が沙耶の仏壇や墓標の前に向かうことはなかった。無意識のうちに、現実に直面することを避けていた。

「二人はまた急に、どうして娘に会いに来てくれたんだい？」

「神木先輩が沙耶ちゃんの後輩だったと聞いて、高校の部活の話を聞いていたんです。けれど二人とも、沙耶ちゃんにすっかり会いに行けていないとわかって。突然でご迷惑だとは思いましたが……」

「いや、ありがとう。沙耶もきっと喜んでいるよ」

絢辻氏の視線が総一に向く。

「神木君、沙耶は高校ではどんな生徒だったろうか。高校生にもなると、娘の様子もあまりわからなくて。そんな親の怠慢が故に、娘が死んだ理由もわかっていないのだけれど」

総一は膝に置いた拳をぐっと握りしめ、どうにか言葉を搾(しぼ)り出した。

「沙耶先輩は、少し変わった人でした。捉えどころがないというか。友達が多い人だったかはわかりませんが、不思議と周囲から一目置かれていたような、尊敬できる先輩でした。そんな先輩の書いた作品に魅かれて、憧れて、僕は……」

総一は途中で声を詰まらせた。絢辻氏は優しく頷いて、ありがとうと、彼の方に手を置いた。喉元で、言葉にならない奔流が込み上げてくる。総一は唇を噛みしめて、感情の本流をどうにか飲み込んだ。

「確かによく変なこと言うところありましたね。独自の感性で喋ってるみたいな。面白かったですけど」

けど、と七瀬の言葉が続く。

「私がよく遊んでいた時の沙耶ちゃんとは、だいぶ印象が違いますね。お父さんの前でこんな風に言うのは失礼かもしれないですけど、甘えたがりだけど人見知りで、友達も上手く作れなかった人でした。だからか高校に入ってからも、年下の私にもよく小さな悩みを相談するために電話してきてました。一言で言えば、可愛いって言葉がすごく似合う人でしたね」

総一は絶句した。湧き上がる疑問を差しはさむ余裕すらなかった。この女は、何を言っているんだ？

「そうだね。勉強の方は優秀で手がかからなかったが、そういうところは親としても心配だったよ。でも、仲良くやれていたみたいで何よりだ」

絢辻氏が言葉を挟む。だが総一の耳には、その言葉は右から左へ抜けていくだけだった。

「へえ。昔はそんな人だったんだね……」

「昔は、というよりは使い分けだったと思いますよ。ほら、家族や昔馴染みと話す時は、口調や態度が変わることあるじゃないですか。恥ずかしい口調とか、本性とか、先輩も隠しません？」

「……ああ」

七瀬は次々と、沙耶との昔のやり取りを語った。引っ込み思案、自信が持てない、すぐ相談してくる。そこで語られる沙耶の人となりが、総一の顔から色を奪っていった。両親に血が繋がっていないと告白されても、これほどまでに血の気が引くことはなかっただろう。

彼女の語る〝沙耶ちゃん〟という人物は、総一が〝絢辻沙耶という人間に対して固持したイメージ〟とは、あまりにも乖離(かいり)していた。

総一はしばらく、曖昧な相槌を打つことしかできなかった。ただ冗談のような戯言(ざれごと)に付き合っている、そんな気分だった。

玄関の開く音が、呆然としていた彼の意識を正気に戻した。

静かに近づく足音に、一同の視線が集まる。
絢辻氏は立ち上がり、障子を開ける。
「おかえり、鈴」
廊下を歩いていた制服の女の子に、絢辻氏が声をかける。
総一が二年前まで通っていた学校のものと、同じ制服だ。顔を隠す長髪や、丸くなった背中が大人しい印象を与えた。
鈴と呼ばれた少女は、身体をぶるっと震わせ、軽く顎を引いて一礼した。
「あの、忘れた教科書とノートを取りに来ただけなので、すぐに学校に戻ります」
視線を上げた彼女が絢辻氏の後ろにいる総一と七瀬に気付くと、怯えるように下を向いて目を逸らす。彼女はぺこりと頭を下げて、階段を駆け上がっていった。
「再婚されたんですか？」
「去年に会社の女性とね。妻も病気で亡くして、娘もあんな風に逝ってしまって……みっともない話だが、支えになってくれる人を求めていたんだろうね。あの娘は今の妻の子だよ。来年受験だけれど、あまり勉強熱心じゃなくてね。本当の親じゃないと、こういうことはやはり難しいのかもしれない」
「奥さんは、今日は？」
「友達と出かけているよ。休日ぐらいは羽目を外してもらった方が、私も気が楽だからね」
七瀬は始終、満面の笑みを作って絢辻氏の話を聞いていた。
絢辻宅を後にして、総一らは近くの喫茶店に入った。休日の午後の喫茶店は、まばらに空席が目につく程度には空いていた。
家を辞する前も、絢辻氏は人の良さを滲ませた柔和な表情で、玄関まで二人を見送った。
「どう思いましたか」
射るような視線が総一に向けられる。彼女の表情にこれまでのような気軽さはない。険しい眼差しだけが総一を責め立てた。
総一は頼んだブラックコーヒーを口に運び、もどかしさとなって喉元に溜まっていた澱を嚥下した。
「すごく、驚いたよ」
「驚いた？　ああ、沙耶ちゃんのことですか。先輩は随分と沙耶ちゃんのことを尊敬、というより崇拝していたみたいですからね」
「それは僕と会う前からわかっていたの？」
「沙耶ちゃんの話からの推測で。本人はそんな風に捉えていなかったみたいですけど、恋愛や性的関係を求めるでもなくそんなに固執するなんて、少し変ですからね」
遅れて七瀬の前に、コーヒーカップとガトーショコラの載っ

た皿が運ばれてくる。彼女はそれにフォークを突き立てると、形が崩れ落ちるのにも構わず大きくカットして口に運んだ。無残に傾いた焦げ茶色のケーキは、冒涜的な趣を漂わせる。

「どうしたって、私の知っている沙耶ちゃんとは、違う人間を語っているみたいに聞こえましたよ」

「君からしたら、僕の持っているあの女性へのイメージは随分と滑稽だったろうね」

「ええ。宗教にはまる人って、こういう人なんだろうなって思いました」

遠慮もなく、彼女は鼻で笑った。ただ普段は挑発的にも見える彼女の瞳は、まったく笑っていなかった。

「少なくとも私の知る沙耶ちゃんは、神木先輩に似ていましたよ」

いつだったかの沙耶の言葉がリフレインする。

「自分を偽って、周囲の期待にそえるような姿であろうとするところとか。誰に責められるでもないのに、無意味な隠し事をしようとするところとか。沙耶ちゃんの方が可愛げがありましたけど」

総一は思わず鼻を鳴らす。似ているという言葉は総一にとって何よりも残酷で、自分を滑稽にさせた。

「些細なことをよく馬鹿正直に相談してきて。そういう沙耶ちゃんの、どうしようもないところを見ているのが私は好きだった。昔馴染みの知り合いには付き合ってるのか、なんて面白がられるぐらい仲良かったですし、実際に愛していたのかも」

七瀬はにべもなく愛なんて言ってのけた。

「そうそう。先輩が入れ込んでいる沙耶ちゃんの小説書きも、元は私がやっていたことの真似事なんですよ。面白そうだから、葉月ちゃんみたいに賢くなりたいから、なんて言って。たぶん先輩が思っているような特別な意味もないですよ」

「僕は彼女に理想を押し付けていた、あわれな信徒だった訳だ」

「でも、才能があったのは事実でしたよ」

七瀬の表情が沈む。総一がよく目にしていた、人当たりの良い笑みを浮かべる七瀬は目の前にいなかった。にもかかわらず、彼女の表情はいつもより起伏に富んで映った。

「なにせ彼女は、それまで小説なんてほとんど読んでなかったですから。私だって自信なくしましたよ。それが面白くなくて、沙耶ちゃんにあたって、少しずつ疎遠になって。気が付いたら彼女はいなくなってた」

倒れたケーキの欠片をフォークに突き刺して集めながら、苛立ったように口元を歪める。

「笑えますよね。普段は偉そうに余裕ぶっているのに、少しのことでボロが出たんです。しかもそれを今でも引きずって

る」
「僕だって他人のことは言えない。自信を喪失した後、七瀬さんとはまったく逆の考え方をしただけだった」
「でもきっと、そんな先輩がいたから沙耶ちゃんは三年生の時まで自殺しなかった。私はそう思いますよ」
窓の外の景色に、薄らと影が差す。空は今にも雨が降り出しそうな曇天だった。
「その口ぶりだと、まるで沙耶先輩が自殺した理由がわかっているようじゃないか」
「わかりませんよ。でも、アテはあります」
カップを手に取ろうとする総一の手が、止まる。
彼女はフォークに突き刺した欠片を口に運び、ゆっくりと咀嚼する。存分に味わって飲み込んだ後、彼女はまた勿体つけて口を開いた。
「いくつか仮説はありますけど、一番有力なのはあの男に殺されたということです」
数秒、沈黙した。総一は視線をさまよわせ、隣席に客の姿が見当たらないことを確認した。
「あの男というのは、沙耶先輩のお父さんのことかな」
一口だけコーヒーを含んだ後、総一はゆっくりと言葉を吟味して尋ねる。
「そうですけど、なんか気に入らないですね」
七瀬は不機嫌に口を曲げる。彼女が拗ねたような表情を総一に見せるのは、これが初めてだった。
「あんまり驚いてなさそう」
「驚いているよ。でもこの場合に、あの男、という言葉でお互いに通じる相手は、一人しかいない」
「なら話は早いですけど。どう思うって聞いたのは、あの男についてです」
「とても優しそうで、娘想いの人に見えた。沙耶先輩を自殺に追い込んだなんて、とても思えない」
七瀬はしばらく無言でいた。値踏みするような視線が、総一を射抜こうと構えている。
「私にもそう見えましたし、事実として溺愛していたんでしょうね。それが高じて手を出した。単純な暴力だったのかもしれないし、想像したくもないような下衆い触り方だったのかも」
指先を絡めるようにしなやかに動かす。
「そうまで言うのだから、明確な証拠があるのかな」
「ないですよ。そんな証拠」
強い口調で断言した。彼女は総一の目の前に、白いフォルムの携帯電話を置いた。
「強いて言えば、この電話にかかって来た、沙耶ちゃんからの言葉です。先輩も電話をもらってるんですよね」

「ああ。でも何も教えてくれなかった。君は本人から直接、あの男のせいだと聞いたのか？」

総一は思わず身を乗り出す。七瀬は刹那(せつな)だけ笑みを見せて、また淡白な表情に戻った。

「いいえ。私が聞いたのは別れの言葉だけです。具体的なことは言わなかったけど、裏を返せば庇(かば)うような相手だったから何も言わなかったと考えられます」

しかしそれでも納得はできなかった。七瀬の言うような理由で隠していたとしても、犯人を彼女の父親と断定するのは早計に過ぎる。

総一の疑問を見透かしたように、七瀬が先に口を開いた。

「こればかりは昔馴染みの私だからそう判断できただけですよ。あの男は自分もそうだからか妙にエリート志向なところがありまして。子供の頃はなんとも思わなかったけど、遊びに誘いに行くと今日は忙しいからってよく断られました。それが小一の時から。その時はまだよかったけど、お母さんが病気で亡くなって、一人で立派に育てなきゃって変な意識が働いたんでしょうね。中学に入るとめっきり遊ぶ機会も減りましたよ」

「そこで行き過ぎた教育が行われていたと」

「あくまで推測ですけど」

七瀬は目を細めて、何もない虚空を眺めていた。

「でも思えばその頃から、沙耶ちゃんの雰囲気も少し変わったのかも」

彼女は経験則から一番妥当性の高そうな予測を立てた。その結果、沙耶が自殺したのは、父親からの虐待に耐えかねたと予想した。

「私はそれから転校して、沙耶ちゃんとは電話でしか話してないし、さっき言ったような理由でその回数も減っていきました。きっとその頃から」

七瀬は手で弄(もてあそ)んでいたフォークを傾いたガトーショコラにまた突き立て、更にぐちゃぐちゃに崩した。

「もし沙耶ちゃんが、根っこから先輩の言うような人に変わっていたとすれば、その虐待から精神を病んでしまった、ということだと思います」

間違っても、沙耶は総一の思うような、生まれた時から神秘性や特殊性を帯びている人間ではない。そう念押しされている気がした。

「これも推測ですけど、あの男の再婚相手の娘――鈴ちゃんでしたっけ、彼女も危ないと思いますよ」

「沙耶先輩の代わり、ということか」

「ええ。さっきの会話だって妙でしたよ。学校で勉強してくるって聞いた矢先に、勉強熱心じゃなくて困っているなんて。彼女の成績はそれほど良くないようですから、そう決めつけ

ているんでしょうね」
「成績って、どこからそんな情報を」
「勿論、聞き込みをして。一応は地元の高校ですからね。同学年の知り合いを頼れば、情報ぐらい集められますよ」
「僕にはそうは思えないけれど」
「それは集めようとしないからですよ。知り合いが彼女と同じ美術部だった偶然もありますけど」
集めようとしないからという言葉は、まさしくその通りだったのだろう。
「ずっと根気強く調べていた訳でもないですけどね。思い出しては挫折しての繰り返し。そして最近また思い出して、そのために神木先輩にも近づいた。というよりも、神木先輩に会ったからまた思い出した」
「僕に会ったから？」
「気付いていないようですけど、三年前にも会ってますよ。沙耶ちゃんが死んだばかりの頃、何か知らないかって尋ねに来た女子高生。覚えていませんか？」
顔や会話の内容は覚えていないが、そんな女子高生がいたことは覚えていた。総一は改めて彼女の顔を見るが、やはりそれでも大学以前に彼女の顔を思い出すことはできなかった。
「もっとも、先輩は思うような情報を提供してはくれませんでしたが。まあ、全部教えてくれていればですけど」
「言えることは警察の人にも全部言ったよ」
七瀬は頬杖をついて、深い溜め息を吐き出した。
彼女の無味乾燥な表情を見つめながら、総一は口の中で次に発する言葉を吟味した。
「いろいろと教えてくれてありがとう。知ることができて良かった……とは言い難いけれど」
「神木先輩はどうするんですか？」
「君はどうするんだ」
「私は決めていますよ。むしろここからが、先輩を呼び出した本題ですから」
七瀬は口直しに、ミルクのたっぷり入ったコーヒーを啜った。
「あの男が沙耶ちゃんを追い詰めたという証拠、それを見つけるのを手伝って欲しいんです」
買い物にでも誘うような軽い口調だった。ただ、店内に流れる穏やかな音楽や、漂う砂糖の甘い匂いが、途端に場違いなものになっていくように感じられた。
「警察が調べてもわからなかった証拠を、僕たちが掴めるとは思えないが」
「物的証拠でなくてもいい。ただ私が、あの男が沙耶ちゃんを追い込んだとわかればそれでいい」
「その後は？」

口元に指をあて、考える素振りを見せる。
「復讐しようかと」
「まさか、殺しでもするって言うのか」
「ええ、殺します」
彼女は静かに頷いた。
「沙耶ちゃんだけが私の本当の友達と言えた。こんな私が、お互いに打算なく付き合うことができた唯一の人だった。向こうは向こうで、友達がいなかった事情もありますけどね。私がこんなことを言っても信じられないでしょうけど、救われていたんですよ。理由は歪(ゆが)んでいたかもしれませんけど」
きっと睨(にら)み付けるように向けられた眼差しが、視線を逸らすことを許さなかった。
「だから許せなかった。彼女が投げやりな理由で自殺するとは思えないし、なら誰かしらその要因を作った人間がいることになる。私はただ、沙耶ちゃんが他の誰かに追い詰められて死んだなんてことが、我慢ならなかった」
「だから殺してやりたい、か」
「当然、事実がわかればという話で、見境なく凶器を振るったりはしないですよ」
「その計画に、僕なら加担するとでも？」
「先輩ほど沙耶ちゃんのことを大切に思っていたならわかると思ったんですよ。私の悔しさも」

総一の口から、意図せずに乾いた笑いがこぼれ出た。やっぱり悪いことをすると、どこかで埋め合わせをさせられるのだと思った。
そして同時に、自分の愚かさを嘲笑(あざわら)わずにいられなかった。総一の持つ沙耶の理想像を散々剥がされたというのに、それでも総一はまだそのイメージを固持しようとしていた。そしてそのために、また罪を重ねようとしていた。
「勿論すぐに決めろとは言いませんし、実際に罪を被るのも――」
「わかった」
総一は迷いなく頷いた。あまりにも簡単な反応に、七瀬の表情がつい曇る。
「……冗談で言っている訳じゃありませんよ。私はこの三年間、ずっと同じことを考えて来たんですから」
「わかっているよ。それに殺人に協力するとしても、あくまで十分な証拠を見つけられたらという場合だ。それとその場合、一つだけ条件がある」
「条件？　見返りですか？」
「違うよ。証拠を見つけて、計画を実行するとした時の話だ」
彼女は目を不満げに細めながら、どうぞ、と掌(てのひら)を差し出す。
コーヒーを啜(すす)り、口の中を十分に湿らせてから言った。

「殺すのは僕がやる。下手な証拠の隠ぺいもしなくていい」
七瀬からの訝った眼差しを向けられたまま、しばらく沈黙する。
「それって、先輩が一人で全部やって泥も被って終わり、ってことですよね。私から持ち掛けた話なのに、随分おかしな結末じゃないですか？」
「そうかもしれない。ただ、僕にとってもこれは、罪滅ぼしのためにしなければならないことだと思うんだ」
「罪滅ぼし……なんだか腑に落ちない言い回しですね」
不満そうにしながら、彼女はケーキの最後の一かけらを口に入れた。
「それで、他の仮説というのは？　他にも何か心当たりがあるようだったじゃないか」
七瀬は口にケーキの欠片をつけたまま、忘れていたと言うように頓狂な声を出した。
「残り二つありますが、どちらもほとんど可能性はないと思いますよ。それでも聞きますか？」
総一は頷いた。
「一つはいじめです。でもこれは高校生の自殺なら一番有り得ると思っただけです」
もう一つは、と空になった皿を机の脇に除けて、何の気なしに口にする。
「神木先輩だと思ってます」
「僕が？」
「よく言うじゃないですか。犯人は現場に来るって。少し違いますけど、そういう意味では神木先輩ほど怪しい人はいないですから」
喋り方こそ雑談をするようだが、その時の七瀬の瞳は、片時も総一を逃がさなかった。
「なるほどね。でも君はそんな人間に捜査の協力を頼んだのか」
「ええ。だって都合がいいじゃないですか。二人まとめて動向を調べられるんですから」
七瀬の顔に、普段の人当たりのいい笑みが戻る。
危険だと直感した。この七瀬という女は自分にとっての敵だと総一は確信した。このまま絢辻氏のことを調べれば、七瀬は沙耶の自殺の原因を突き止めてしまうかもしれない。それだけは、なんとしてでも防がなければならない。

翌週の土曜日、一三時。空はここのところ、どちらとも言えない曇り空が続いていた。くすんだ白雲を眺めながら、総一は母校である高校の前に立っていた。
「こんにちは」
絢辻鈴は呆然として立ち尽くしていた。一度顔を合わせた

ことがあるとはいえ、まったく知らない他人が押しかけて来たのだから無理もない。
「神木と言います。先週少しだけ顔を合わせましたよね」
「あの、何か御用ですか」
鈴は肩に提げた鞄の紐をぐっと握り直す。
「すみません。家を訪ねたんですけど留守のようで」
「義父は、休日出勤らしいですけど」
「お義父さんにもですけど、あなたにもできれば話を伺いたくて」
「私に、ですか？」
彼女はやはり警戒したまま、返事を濁した。予想のつく反応をする鈴に対し、総一は笑みを絶やさないように気を遣いながら言葉を次いだ。
「沙耶先輩――君のお義姉さんにあたる人のことで、何か知っていることがあれば聞きたいんです」
「その人って、うちの高校で自殺したって……」
沙耶の話題に触れると、彼女は怯えていた態度を潜ませた。口元に手をあてて、何かを考えるような仕草をする。
「義父から多少は話を聞いていますけど、その、あまり詳しいことまでは……」
言い終えないうちに総一は鈴に詰め寄った。彼女が退くのも構わずに、興奮を露わにした。
「それでもいいんです！　沙耶先輩にまつわることなら何でもいいので聞かせてください」
「は、はい」
半ば強引な手段だった。だが押しに弱そうな鈴のような女の子なら、こうすれば話に応じてくれると思っていた。
内心でほくそ笑む醜い自分に、総一は唾を吐き捨てた。

七瀬と絢辻の家から帰った夜、総一はこれから自分のすべきことを頭の中で整理した。絢辻沙耶が死んだ本当の理由を隠す。そのためにまず、沙耶の父親を殺す動機を作らなければならない。
大まかな筋書きはこうだ。自分は絢辻沙耶の父親を殺し、そして捕まる。動機は、被害者が自分と交際していた絢辻鈴への虐待を行っていたことによる憤り。鈴とは彼女の義姉が高校の先輩だったという繋がりから知り合い、親しくなった。その彼女を守るために父親の許へ抗議しに行くが、口論になった末に揉めて、感情に任せて殺害してしまう。
そのためにまず、絢辻鈴に接触した。七瀬を説得して、彼女から情報を引き出すのは全て自分に任せるように取り計らった。

一週間前も訪れた喫茶店は、常連客であろう人々が席を占

めている以外には空席が多い。コーヒーと砂糖の甘い匂いが漂う通路を通って、奥まった位置にある二人掛けのテーブルに向かう。
「美術部なんだって？」
「え？　そうですけど」
「ああごめんね。この前訪ねた時にお義父さんが話していたんだよ」
嘘だ。鈴については七瀬から聞いていた。誰でも知り得るような情報しか聞いていないが、変に勘繰られないためにはむしろ丁度いい。
「僕も同じ高校だったから、今どんな感じなのか興味があって」
「変わったところは、ないと思います。何か大きな実績を残したとか、そういう話は聞いたことはないので」
「そっか。絵を描くことは好きなの？」
「好きというより、数少ない長所だったので。周りにおだてられて」
「僕も同じだったよ。文芸部だったんだけど、小説も人並みに好きなぐらいだった。でも中学校の時だったかな、学園祭の劇でやる台本に関わることになったんだ。そこで話や文章を作るのが上手いって言われて、気付いたら今も書いてる」
「あ、わかります。私も小学校で描いた絵がたまたま校内の賞に入選して、仲の良かった子にすごく褒められてつい――」
興奮気味に早口になっていたことに気付いて、慌ててすいませんと謝る。思わず吹き出した総一が口を押さえると、彼女はメニューで顔を隠してしまった。元々外ではよく喋る、人懐こい娘なのかもしれない。ただ特定の相手に対してはその態度は鳴りを潜めてしまう。そういった人間は、いくらでもいる。
「でも文芸部は人が減って、来年に廃部になるそうです」
「そうなんだ……あんなこともあったし、仕方ないね」
彼女は俯（うつむ）いて謝罪の言葉を呟いた。優しい娘なのだろう、と総一は思った。それだけに、つけ込まれやすく、追い込まれやすく、抱え込みやすい。総一は、沙耶と同じ制服を着る鈴を彼女に重ねて見た。けれどやはり、彼の知る沙耶とは似ても似つかない。
「えっと……沙耶さん、のお話ですよね」
「うん。知っているかもしれないけれど、先輩の死は自殺したということ以外よくわかっていないんだ。今更だけれど、やっぱり理由を知りたいんだ」
鈴は眉根を寄せて考えてみたが、表情は芳（かんば）しくない。総一にしてみれば、むしろ知っていては都合が悪かったが。
「すみません。私も少し聞いているだけなので。明るい人だったとか、部活で小説を書いていたとか、たぶん神木さんの知っ

ている話ばかりで」
「それでもいいから、聞かせてもらえないかな」
鈴はたどたどしい口調で、自分の知っている沙耶という人物について教えてくれた。当たり障りのない、少し調べれば誰でもわかるような情報ばかりだった。総一は安堵した。計画のためもあるが、これ以上自分の知らない沙耶の意外な一面など、聞きたくなかった。
「やっぱり目ぼしい情報はないか。これは単純な疑問なんだけど、鈴ちゃんは人が自殺する原因って、なんだと思う？」
疑念はほとんどなかったが、鈴がどこまでのことを知っているのか鎌をかけた。何もなければそれでよかったが、彼女は急に身を縮こまられて、脇に避けていたメニューに視線を逸らした。何か言い辛いことがあるようにする彼女の様子を、総一はじっと窺った。
「ああ、注文がまだだったよね」
「そうじゃなくて、急に名前で呼ばれたからびっくりして」
身体からどっと力が抜ける。総一はごめんねと言いながらも、そんなことで焦らせるな、と内心で毒吐いた。
「絢辻さんと呼ぶと、昔の沙耶先輩の呼び方と同じになると思って。嫌だったら改めるよ」
「いえ、どちらでも大丈夫です」
「じゃあそのままで。それで自殺の原因なんだけど、高校生の場合、やっぱりいじめや虐待、というケースが多いと思う。けれど僕や彼女の幼馴染の七瀬さんが調べた限りでは、いじめはないようなんだけど……」
緩み始めていた鈴の頬が、強張るのが見て取れた。
「わかりません。たぶんお二人が知っている以上のことなんてないと思います」
「そっか。でも彼女の家に遊びに来ていた友達や近所の人も、家庭内に違和感を覚えたことはないと証言しているらしい。だから少なくとも沙耶先輩の生きている頃には、そんな問題もなかったんだろう」
俯き加減に考える素振りを見せながら、視線だけは鈴に向ける。
鈴はやはり目を逸らした。彼女の性格からすれば、後ろめたいことがなくても同様の反応を見せたかもしれない。
それでも総一は自分からは言葉を足さなかった。視線を向けたまま、鈴の反応を窺った。
もう一度、視線が合って、目を背ける。
「お義父さんも、何か思い当たるようなことを口にしていないかな」
「すみません。あまりそういう話は聞いていないので」
「じゃあお義父さんとは、どんなことを話すのかな？」
「学校や進路の話が多いです。私は成績があまり良くないの

で、溜め息交じりに怒られたり……。優秀だった娘さんと比べてがっかりしているのかもしれません」
鈴はまた口籠った。
現状を確認するには十分だと判断した総一は、肩の力を抜いた。脇に除けていたメニューを手に取り、鈴に差し出す。
「話に付き合ってもらってありがとう。今日のお礼だから、好きなものをいくらでも頼んで」
小さく頷いて、彼女は差し出されたページに書いてあった、コーヒーとケーキのセットを指差す。そのページでは最も値段の安い商品だ。
店員を呼んで、同じセットを二つ注文する。注文の確認を取った女性が引き返すと、店内に流れるピアノの旋律が沈黙を繋いだ。
その間に、総一は目を閉じて思考を巡らした。その後、徐に声を出した。
「僕は両親と、あまりいい関係が築けなかったんだ」
虚空に向けられていた鈴の注意が総一に向く。
「態度が気に入らなかったらしい。僕はあの人達の気に入るようには上手くできなかった。何も変わらないまま、今は家を出て一人で暮らしてる」
総一はそこで言葉を止めて、また次の言葉を探した。適当にでっちあげている嘘にしては、いけしゃあしゃあと喋るものだと自分に呆れた。
「だからって訳じゃないけど、家族との付き合いで悩みがあるなら話ぐらい聞けると思う。愚痴を吐く相手だって、僕も時には必要だったから」
数秒の間を置いて、あの、と彼女の口から短い声がこぼれ出る。
「教えてもらえませんか。その、沙耶さんのことを」
「え？」
総一は今までの演技も忘れて、つい間抜けな声を出した。
後になって思い返しても、鈴が沙耶のことを聞いたのは、どんな人間と比較されているのかという興味本位の他なかったのだろう。総一は自分の記憶にある絢辻沙耶という人物を彼女に語った。
奇しくも沙耶の話題のおかげで、彼女とは思いの外早く打ち解けることができた。何度も会ううちに、沙耶の自殺の原因を探るという仮初の目的は、思い出した時に話す程度になった。鈴の勉強を見るという申し出をした時は、本人からはともかく絢辻氏からは流石に反対されると思っていた。けれどあの男は、総一が沙耶の受験した国立の大学に通っていることを知ると、むしろお願いすると言ってくる始末だった。場所が総一の家でも、まったく心配している様子もない。けれど日々の試験の結果には、欠かすことなく報告を求めてくる

という。

反吐が出た。同時に、そんな現状をよしとする自分を忌々しく思った。

計画と呼べるほど周到なものではなかった計画は、驚くほど順調にことが運んだ。絢辻鈴に接触して三ヶ月、そんな彼女からの信頼を得て付き合うようになるまでに、時間はかからなかった。彼女に頼れる友人と言える存在はいないとわかっていたが、彼女は総一が思っていた以上に早く彼を信用していた。

「右腕、どうかしたの？」

「えっ」

驚いた鈴は、制服の袖の上を右腕でさすっていた。無意識で自分でも気付いていなかったのだろう。

鈴が抵抗するのも構わず、総一は強引に袖をまくった。目立った傷こそなかったが、打撲で腫れた痕のようなものが残っていた。すでに治りかけているのか、虫に刺されたと言われても納得のできる程度のものだ。

また上手くことが運んでしまった。

彼女に沙耶の遺品を探すように頼むと、期待通りに彼女は絢辻氏の怒りを買ったようだった。勉強を教えているだけでは、あの男が何も問題を起こさない可能性がある。だから総一は、絢辻氏の反感を買いそうなことを何度も鈴に頼んだ。

「ごめん。本当にごめん」

鈴の手を握って、総一は酷く弱々しい声で謝った。

あまりにも計画通りの行動を起こしてくれる彼女に、総一は言い知れぬ罪悪感を覚えていた。

計画はこの上なくうまく進んでいる。一つだけ誤算だったのは、絢辻鈴に同情し始めたことだった。正鵠を射るなら、総一は自分が思っているよりも脆かったことだ。

その日は一晩中、吐き気に苦しみながらトイレで膝をついていた。内側から責め立てていたのは彼女のことだけじゃなかった。部活やアルバイトの人間関係、七瀬が真実を暴いて突きつけてくるんじゃないかという不安、自分の犯した罪に対する罪悪感。そうした今まで溜め込んでいたものが一気に決壊したように、一頻り吐き続けた。

「その、アイデアが上手く浮かばなかなかったんですけど、総一さんが以前に薦めてくれた沙耶さんの本を思い出して。それと、アイデアをもらったことと、いつもお世話になっているせめてものお礼になればと思って……」

鈴の言葉を断片的に耳にしながら、総一はその絵をじっと見続けた。

どうしてと叫び出しそうになった。利用されているにも関

わらず、なんて愚かなのだろうと思った。どうして総一の意に反した行動をしてくれないのかと、憤った。行き当たりばったりの拙い計画が、どうしてこうも上手くいってしまうのかと、焦り始めた。

目の前のこの絵が、総一の固守する理想がただの妄信だと告げているようだった。自分の愚劣な行為を咎めているように思えてならなかった。

「美大？」

それは以前に総一がほのめかした選択肢だ。物事に執着を見せない彼女が、絵のことだけについては熱心に語った。だから総一は、彼女が義父の意に反するような選択を取らせようと、何度もそんな話をした。

当然、彼女が実際にそんな進路を選ぶかなんてわからなかった。むしろその可能性の方が断然低い。そんな選択をしなければ、このまま受験して、あの男の逆鱗に触れることだってなかったはずだ。総一はどこかでそんな未来を望んでいたのかもしれない。それなのに彼女は、可能性が低いと思っていた選択肢を選んでしまった。

「じゃあ今日は、賞をもらったことと新しい目標への前途を祝して、豪勢にいこう」

胸にどうしようもない後悔を抱えながら、総一はそれでもそんな言葉を口にした。そして一瞬、今なぜ後悔していたのかわからなくなった。

『鈴ちゃんの方は大丈夫なの？　何かあれば言い辛いことでもすぐに相談して欲しい』

しばらくして返ってきた返信は『心配してくれてありがとうございます！　大丈夫です』と簡素なものだった。ただそれだけの文章でも、やせ我慢をしている気配は感じ取れた。

連絡を取り合うだけの日々は、ひたすらに苦痛だった。今この状況を作り出したのは誰なのか自分に問い質し、その度に胃の中の物が逆流してくる。胸の中を漂うもやもやとした煩わしさを晴らすために、いくつかグラスを割った。原稿用紙を破り裂いた。勿論そんなことは何一つ晴れなかった。

総一を何よりも冷静にさせたのは、沙耶の書いた小説だった。彼女の物語を読むことで目的を思い出し、自我を保つことができるようになっていた。けれどそもそも、総一は自我なんてものを保てていたのか、自分でもわからなくなっていた。

「もういいから……ごめん」

ぐっと力を込めて鈴を抱き寄せた。互いを慰めるように肌を触れ合わせ、交わった。一つ一つの行動に及ぶ度に押し寄

せる嘔吐感を必死に飲み込んだ。一連の行動に精神的快楽はなかった。絢辻鈴という少女の弱さに対する同族嫌悪と、自身の背徳的行為に対する憎悪が、内側から身体を蝕み続けていた。

壊れていく心を殺して、総一はその時間が終わるのをただ待った。この時にはもう、自分の行為の何が間違っていたのか、ほとんど分別はつかなくなっていた。

× × ×

コンビニに行くと出て行った彼のいない部屋で、彼女は布団に顔を埋めていた。落ち着いてくると身体が心もとなくなり、脱ぎ捨てた服や下着を集めた。

彼の部屋で一人になって、不意に考えてしまった。〝彼女〟の言うように、あの人は本当に人を殺せるような人間なのだろうか。〝彼女〟が言う、絢辻沙耶の自殺現場での総一の行動も、あくまで疑惑でしかない。確かに総一は、沙耶の死について何かを知っている様子ではあった。でも隠さなければいけないのは、自分に都合の悪いことばかりではないではないか。例えば誰かを守るために隠し事をすることだってあるはずだ。そうに違いない、と鈴は純粋に信じた。

彼が出て行って二十分が経ったが、帰ってくる気配はない。着替えを終えた鈴はようやく立ち上がって灯りを探す。暗がりの中を歩く彼女の足取りは自然に覚束ないものになった。

「あっ」

つま先に当たった何かが鈴の足に倒れる。おそらく彼が持ち歩いている鞄だろう。開いていたらしく、中身までがボロボロと落ちてしまった。

慌てふためきながら手近な壁に手をつくと、ようやく電源を見つける。突然の光に明滅する視界に、筆箱やノートの類が見事に散乱した惨状が映る。

こんな些細なことですら自分は上手くいかない。情けない気分で溜め息を吐きながら、散乱した中身を鞄に戻していく。けれど、その中にあった原稿用紙の入ったファイルを掴むと、彼女の手が止まる。

話題に上ることは何度もあったが、鈴は総一が今書いている小説を読んだことがない。興味はあったが、それを聞くと彼はすぐにはぐらかして、鈴の絵の話に話題をすり替えた。聞かれたくないということはわかったから、彼女もその話題に執拗に触れることはなかった。

何かを隠している彼の本心を、少しでも知りたいと思った。その興味心が、勝手に他人の鞄に入っている物を読むべきではないという良心を押し退けた。

鈴は申し訳ないと思いながら、ファイルから原稿用紙を取

り出した。一番上にあったものはまだ書きかけのページらしく、ほとんど白紙の状態だった。
最初のページを探して、原稿用紙を流し読みして捲(めく)っていく。そして数十枚の原稿用紙の中から、一枚だけ空白部分の多いページを見つけた。はじめ彼女は、そのページにタイトルなどが書いてあるからだと思った。けれどそのページから数枚だけはやけに古びており、紙質や筆跡も異なるものだった。
鈴は無意識のうちにその用紙に書かれた内容を読み、まだ眠気眼だった目を見開いた。
「どういうこと……？」

× × ×

「どうして沙耶ちゃんの遺書を隠したりしたんですか？」
総一の視線が一瞬、自分の肩に提げた鞄に向けられる。
「何のことかな？」
「まさか肌身離さず持っているなんて思いませんでしたよ。部屋の中を隈なく調べても出てこないから、とっくに捨てたのかと諦めていたんですけどね」
「いつだったかの空き巣は君か」
「ええ。先輩がセキュリティも何もあったものじゃないボロアパートに住んでたおかげで助かりました。鍵の開け方とか、ネットに書いてある情報でも案外使えるものですね」
七瀬は原稿用紙を指で摘まみ、ひらひらと風に揺らす。まるで総一を嘲笑うように。
だが総一は、冗談でも聞き流すようにかぶりを振るだけだった。
「面白い話だけど、その紙が彼女の本当の遺書というには無理があるんじゃないかな。三年前の、雪に晒(さら)されていた紙がそんなに綺麗な訳がない」
七瀬の持っている原稿用紙には、濡れた跡も黄ばんだ跡も見当たらない。彼女の言葉は得意の誘導尋問で、あの紙は白紙の偽物だ。そう総一は確信した。
『素直過ぎて少し馬鹿な君には失望されるだろうけど――』
七瀬がその言葉を口にした刹那、総一は目の色を変えて七瀬に詰め寄り、彼女の手から原稿用紙を奪い取った。
原稿用紙は総一が思っていた通り、ただの白紙だった。
「先輩の言う通り偽物ですよ。でも今の言葉は、本物ですよね？」
「どこで、知った？　その紙は今も僕が持っているはずだ」
「本物を見た人から写真を貰(もら)ったんです。癖のある汚い字で、確かにあれは沙耶ちゃんの字でした」
総一は記憶を遡ったが、その可能性がある人物は一人しか

思い当たらなかった。
「鈴か」
「ええ。いつだったか彼女に接触して聞いたんですよ。神木先輩に怪しいところはないか。もしかしたらあの人が、沙耶ちゃんを殺した犯人かもしれないと言い添えて」
総一は自分に呆れ果てて笑い声を上げた。喉から絞り出したような、乾いた笑いだった。戸惑いはなく、むしろ支えていた物が取れたような気さえしていた。
「そうか、そうだろうね。今までがあまりに都合が良すぎたんだ」
「勘違いしているようですけど、私が接触したのは今年の秋頃ですよ。彼女はそんなことをする人には思えないって否定してましたから。彼女から聞いた情報なんて、精々が引き出しに鍵をかけて何かを隠してるってことぐらいですし、それも口を滑らせただけでしたから。遺書の件にしたって、純粋に先輩のことを心配して聞いてきているようでしたよ」
七瀬は穏やかだった面持ちを殺し、憎悪に目を光らせた。
「それで私の疑問にも答えてもらえますよね？　この〝何も隠す必要がない〟遺書を隠した理由を」
「隠す必要はあったさ」
「父親に追い詰められて自殺したと訴えるだけの文章をですか？」
総一の口は水平に結ばれたままだった。七瀬は携帯を取り出して、まくし立てるように沙耶の遺書を読み上げた。
その文章に七瀬が驚くような情報は何一つない。総一や七瀬を含めた他の友人たちへのお礼と謝罪。そして自分が死ぬのは、過剰に期待されるのに疲れたからだという。
「確かにこの文面からは、神木先輩をはじめとした沙耶ちゃんに期待を寄せる人達に対する、苛立ちや不満が読み取れる。プロになればいいとか過度な期待を投げつける人達に、もっと自分のそれ以外の部分を見て欲しいと訴えるいじらしさが伝わってきますよ。確かにこれも自殺を後押しした一因だったのかもしれない。でもそれだけですよね？　この遺書にはその後、しっかりと自殺の原因は父親の行き過ぎた教育だと書かれている。精神が不安定で、体調が優れないまま行った受験に落ちて、慰めるどころか罵声と折檻を浴びせるだけの父親への失望が理由だと！」
七瀬は感情をさらけ出し、普段では考えられないような怒声で叫んだ。
「私はあの男と同時に、あなたのことを疑っていた。私もあの日、一足遅れて現場に辿り着いたから」
「全部見られていたのか」
「私が見たのは校庭から屋上を見上げた時に見えた人影と、階段を駆け下りてくるあなたの姿。そして未使用で綺麗なま

まの白紙の原稿用紙」
七瀬は手に持った携帯を強く握りしめる。
「自分に都合の悪いことが書かれているから、あなたは遺書を隠ぺいした。なら彼女を追い詰めたのはあなたということになる」
「なるほど」
「ずっとそう思っていたのに、あなたは沙耶ちゃんを崇拝しているだけの後輩で、恨むような事情は何一つ出てこなかった。そして本当に、それだけだった」
総一は依然として黙ったまま、切々と訴える七瀬を見ていた。
「あなたは、何がしたかったんですか」
泣き入りそうな声が消えると、沈黙が一層重たいものになる。
やがて口を開いた総一は、そんなことか、と楽しみにしていた物語の結末が期待外れだった時のような、退屈そうな声で言った。
「何がしたかったか？　決まってるじゃないか。知られたくなかったんだ」
七瀬は眉をひそめる。当たり前のことだと嗤う総一の真意が、理解できなかった。総一は世間話をする時のように目を細めて、怒気をまとった七瀬を不思議そうに見ていた。
「だって嫌じゃないか。沙耶先輩が、あんなくだらない理由で死んだと言われるなんて、僕には耐えられない」
「……は？」
時間が止まったかのような沈黙。それを破ったのは、七瀬の驚くほど間の抜けた声だった。
「初めて彼女の作品を読んで、彼女に会った時から、僕の中で彼女は特殊な存在だった。目標も生き甲斐も、後悔や過去の傷すらなく、漫然と生きてきただけの僕が、初めて見つけた目標だった。
彼女と話していく中で、彼女も僕と大して変わらない人間だとわかった。大きなトラウマや、特殊な家庭環境や人間関係を乗り越えてきた訳でもない。普通の人と同じように生きてきたけれど、周囲からは一目置かれている。そんな彼女はただ純粋に歪で特殊なのだと思った。だからこそ僕はあの人のようになりたかった。僕でも彼女のようになれる可能性があるのだと信じた」
総一の腕は震えていた。堪えるように歯を噛みしめる彼は、今にも涙を流してしまいそうな声を漏らしていたが、口元は笑っていた。
「そんな彼女が突然死ぬと電話してきた時、僕は正直嬉しかった。やっぱりこの人はおかしい人なんだ。僕の理解も及ばない壊れた人間だったと確信した。だから僕は必死に走った。

死に際に立ち会って彼女の最期を見届けるために。間に合わなかったと知った時は、思わずその場に崩れ落ちたさ」

嬉々として語る総一の表情から、すっと生気が抜けていく。瞳は虚ろになり、唇は反対に、壊れたように笑みを描いていた。

「それが蓋を開けてみればどうだ。私は父親に虐待されて、それが耐えられなくなったから死にます、なんて書かれた手紙が遺(のこ)されていたんだ。血の気が引く思いだったよ。加えて、僕や他の人間の期待が重かった、自分をちゃんと見て欲しかったなんてことまで書かれていたんだ。彼女のおかしな言葉や態度は、虐待で精神を病んでいっただけか？　周囲からの期待に圧し潰されたからか？　彼女はそんな普通の障害で命を投げだすような人間だったのか？　そもそも僕の記憶にある彼女は現実のものだったのか？　彼女と出会ってからの二年間で形作られた、僕を僕たらしめる要因はあの日全てが否定されていった。生きている意味なんてないとさえ思った」

総一は語りながら、自分の胸を押さえた。掌の向こうで心臓が早鐘(はやがね)を打つ。冬の寒空にもかかわらず、こめかみに汗が伝った。

「夢だと思いたかった。彼女はいつまでも理解の及ばない偶像でなければならなかった。だから僕は現実からその事実を消し去った。彼女の遺書を奪って、代わりのものを置いた」

呆然とする七瀬の口から〝そんなこと〟という言葉が零れ落ちる。

「そんなことだけのために、私は四年もずっと……」

冷静な面持ちを取り戻した総一は、同情するような声色で言った。

「けれど僕にとっては、そんなことじゃなかったんだ。互いの優先順位が噛みあわないことなんて、よくあるさ」

七瀬は思わず後退(あとずさ)った。直感がこの男は危険だと教える。総一と同様に、コートのポケットに忍ばせたスタンガンを手で確かめる。

「おかげで彼女の死は謎のまま、誰にも理解されることなく奇妙な事件として記録に残り続けている。だから君に掘り返されたら困るんだ」

「ならあの男を殺すのは逆効果じゃないですか」

「でも勝手に喋られて明らかになる危険はなくなる。それにこの半年間で、彼女に協力してもらって別の動機も作った」

「ずっと苦しんでいたのを我慢させて」

狂ったような総一の笑いが、その途端に引いていく。

「悪いとは思っている。彼女と会う度に、僕の良心は今にも壊れそうだった。あの男の命なんてどうでもいいけど、そのために犠牲にしてきた彼女の時間は取り戻せないと思うと、震えが止まらない。本当にこれで良かったのかと、ずっと自

問したさ。いや、彼女の遺書を持ち去ってからの四年前からずっと、毎日これで良かったのかと自分を責めたさ」
総一は頭を抱えて呻いた。表情を次々に変えるこの男は、七瀬が今まで見てきた総一と一致しなかった。本当に壊れてしまったのではないかという疑念が、七瀬の警戒心を一層強めていく。
「それで七瀬さん。困ったことがあるんだけど」
総一の表情が、いつも通りの人当たりのいいものになる。同時にポケットからナイフを取り出し、刃を剥き出しにする。
「秘密を守るためには、僕は君や鈴ちゃんを殺さないといけないと思うんだけど、どうしようか？」
殺そうとしている相手に向けて、総一は純粋に疑問をぶつけた。
七瀬はスタンガンの安全装置を外し、護身用の準備を十全にしなかったことを後悔した。彼女は無意識に警戒を緩めていた。沙耶の遺書を見て、総一に自殺の原因がないとわかった時点で、事情を知った人間を殺すまではしないだろうと高を括っていた。
けれど総一は、七瀬が思う以上に救いようのない人間だった。七瀬が好む、惨めで不器用な人間の枠組を優に超えるほど、彼は愚かだった。総一はすでに、七瀬が扱い切れる相手ではなくなっていた。
「僕としては、君には黙っていて欲しいんだ」
「え？」
意外な言葉に、構えたスタンガンを落としそうになる。
「君と鈴ちゃんが黙ってもらえれば、あとは僕が警察でいくらでもそれらしい嘘の証言をすれば、四年前の自殺の調査を再開させるなんてことはないだろう。むしろ世間には、彼女の死はやはり謎めいたままだと印象付けられる。それに君は、漫然と日々を過ごすことしかできなかった僕に、せめてもの罪滅ぼしの機会をくれた恩人だ。だからできれば殺したくない」
苦悶に顔を歪めた総一は、痛切に訴えるように声を絞り出した。
総一がどこまで本気で言っているのか、七瀬はわからなかった。ここでわかったと言っても、総一が捕まった後に七瀬が事実を暴露しない保証なんてどこにもない。なのにこの男はそんな虫のいい提案をしてきた。油断させるための方便かと七瀬は考えたが、それにしては稚拙過ぎた。
「……わかりました。私は復讐ができれば満足だし、彼女も無駄に騒ぎを大きくはしたくないでしょう」
「よかった。助かるよ」
ただ純粋に、彼は満面の笑みで目を細めた。誰が見ても心から喜んでいるとわかるほど、その面持ちに曇りはなかった。

七瀬は完全に敵意を失くした。この男はすでに壊れていた。鈴を騙している時からか、沙耶の遺書を持ち去った時からなのかはわからない。けれどいつからか、神木総一という人間の価値観は崩壊していた。にもかかわらず、半端に普通の良心や従来の価値観を持ち合わせたがために、総一はどうしようもなく不安定な状態になっている。

きっと本人は気付いていないのだろう、と七瀬は同情した。彼の崇拝する沙耶よりもずっと、総一自身の方がよっぽど歪な存在になっている。

「じゃあ僕は行くから。鈴ちゃんのことは、頼むよ」

「あの、先輩」

帰ってくることのない道に歩いていく総一を、七瀬が呼び止める。早く行かせてしまえばいいのにと後悔して、それでも最後に聞いておきたかった。

「すり替えた白紙の原稿用紙、あれは結局どういう意味だったんですか」

総一は言い辛そうに目を伏せて、呟くようにして答えた。

「意味なんてないよ。ただ僕が彼女の言葉を代弁しようとした時に、何も書けなかった。それだけだよ」

「もう一つだけ。どうして沙耶ちゃんの遺書を捨てなかったんですか？　あれがなければ私も絢辻鈴も知ることなんてなかったのに」

総一は目を瞬き、おかしなことを聞くと微笑んだ。

「あんな短いものとはいえ、僕が沙耶先輩の書いた文章を捨てるなんてできる訳がないよ」

総一は鞄から原稿用紙の入ったファイルを取り出し、沙耶の遺書を七瀬に渡した。

「僕が持っていると、警察に持っていかれるだろうからね。なら全部知っている君に持っておいてもらった方がいい」

憮然とした表情のまま、七瀬はその原稿用紙を受け取った。

「沙耶先輩の書いた通りだったよ」

ぼそりと呟いた。

「自分の思い通りに行っても、最後には虚しさしか残らなかったよ」

呆れるように笑いながら言ったその言葉は、まだ正気を保っていた。

歩き去ろうとする総一を、七瀬は止めなかった。止められるとも思えなかった。

彼女は寂しげに歩いていく総一の後姿を見送った。月明かりに照らされた彼の輪郭は、次第に暗がりの中に溶けて消えた。

×　×　×

スーツケースに入った当面の生活用品を取り出しながら、鈴は申し訳なさそうに眉根を寄せて七瀬の方を見た。
「本当にいいんでしょうか。部屋をお借りして」
「気にしないで。両親所有の部屋だから遠慮なく借りたけど、私一人で住む分には大き過ぎるし、ほとんど寝床としてしか使ってなかったから」
尚も鈴は口をもごもごとさせて何かを言おうとしたが、うんざりしたように睨む七瀬を見てようやく止めた。
事件の後、鈴は家を出ようと決心した。昔から夫に依存するきらいのあった母親は、事件の後しばらく放心したように気が抜けていた。そんな母親を置いていくようで忍びなかったが、あのまま絢辻の家に残ることはできなかった。家に残っても、お互いが自立するのを妨げるだけだったと鈴は考えている。
だからと言って、美大の試験に向けて予備校に通いながら勉強している鈴には、金銭的余裕はまったくなかった。アルバイトを始めても、勉強と折り合いをつけながらシフトを組んでいるせいで給料もささやかなものでしかない。
事件の後、何かと気にかけてくれた七瀬が部屋を貸してくれると言ってくれなければ、こんなことも言っていられなかっただろう。
「画材とか、臭いのつくものも置くかもしれませんが……」
「うーん、まあ家賃代わりに掃除してくれるなら」
七瀬は目や口を細めて、渋々といった様子で頷いた。
荷物を整理していると、ファイルに入った原稿用紙の束が見つかる。総一が最後に置いていったその物語は、登場人物の名前こそ違ったが、事件の一年前からの体験を綴った私小説のようなものだった。
「事実を隠ぺいするためにあんな無駄な計画を立てといて、それを崩す証拠をいくつも残してる。本当に何がしたかったのかなあ」
ファイルを手に持った鈴は、その内容を思い出していた。目的のために鈴を騙して利用していたことも、その目的が鈴にとって理解し難いものだったことも彼女はすでに知っている。酷い話だと蔑むよりも、どう飲み込んだらいいものかと頭を抱えた。彼の笑顔のどこまでが本当だったのかはわからない。それでも総一が置いていったこの原稿用紙を、感情のままに捨てることはできないでいた。
「まだ良心が残っていたと解釈するなら、こんな人でなしのことは早く忘れろってメッセージかもしれないけど。そんな風に解釈したら、鈴ちゃんが本当のことをあっさり喋って計画もご破算の可能性が大きいけど」
「それもあるかもしれませんけど、たぶん許して欲しかったんじゃないかと思います」

ファイルを眺め見る鈴は、懸命に声を絞った。
「ここに書かれているあの人は、すごく弱い人間に思えました。だからきっと、耐えられなかったんだと思います」
不意に視界がぼやける。瞳を拭いながら微笑を湛えて話す鈴の姿を、七瀬は情緒のない表情で見下した。
七瀬も総一の残した原稿は読んでいる。空き巣に入った時にも断片的にだが目にしていた。私小説の類であることはわかったが、七瀬が読んだ部分に核心に迫る部分はなく、どちらとも言い難い疑念を残すだけだった。
ただ一つわかるのは、総一はどこかで話の内容を変えているということだ。鈴に見せてもらった原稿には、以前に七瀬が読んだページがなく、別の内容が書かれていた。
もし総一がこの小説が世間の目に触れることを含めて計画を立てていたとすれば。最初の原稿には沙耶の偽りの特殊性や歪さが描かれ、総一の本当の動機やその心情について触れられていなかったのかもしれない。それでも彼がその内容を変更し、実際の事実ばかりを綴った物語を残したのはなぜか。
鈴の言うように、良心の呵責に耐えられなくなり許しを乞いたかったからだろうか。それとも――七瀬は、総一が沙耶の遺書を偽造する際に、何と書けばいいのかわからなかったと言っていたことを思い出した。彼は結局、自分の理想に追いつくことができなかったということだろうか。

どちらにしても、四年にもわたって翻弄された彼女にとっては、総一の心情などまったく共感のできない文章の羅列に過ぎなかった。
けれど一つだけ、絢辻鈴が愚かだと言うことに関しては、七瀬にも理解できた。
自分には関係のない都合に利用され、偽りに塗れた好意しか寄せられていない相手のことを、親しげな旧友のように語る少女を愚かと言わずして何と言うだろうか。
いつ出てくるかわからない総一を、鈴はずっと待ち続けるのだろうか。だとしたらそれは、総一にとって最大の罰になるだろう。
「七瀬さんは、本当のことを告発しなくてよかったんですか。七瀬さんにとっては総一さんは……」
「別にいいの。私には元々、世間に真実を広めようなんて正義感はないから。自分が満足できればそれでいいの」
それに、と付け加えた言葉の続きを、彼女は飲み込んだ。きっと真実を世間に広めれば、総一は簡単に命を絶ってしまうだろう。
そんな真似はさせない、と七瀬は決めていた。四年間苦労させられたのだから、自分だけ簡単に楽にしてやるものか。
いつか刑を終えた総一が、ずっと待ち続けていた鈴と対面する。その時こそが、あの狂った小心者への復讐を完全に終

える時だ。
　それまでは、と七瀬は鈴の後ろに回り込み、突然抱きしめるように腕を回した。
「どうしたんですか？」
「可哀想な女の子を慰めようと思って」
　この不器用で損な生き方の少女を見て、無聊（ぶりょう）を慰めるとしよう。